
ネギま！ advance

赤石 ナイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！advance

【Nコード】

N7646X

【作者名】

赤石 ナイ

【あらすじ】

かつての世界で答えを得た、可能性も見つけた。
進むべき道は見えた。

調整者の新たな戦いが始まる。

prologue (前書き)

本作品には作者による独自解釈が含まれており、原作ファンの方々には不快に感じる点もあるかもしれませんがご了承ください。

また、本作品には

『魔法少女リリカルなのはadvance』

におけるネタばれ要素が含まれていますのでご注意ください。

prologue

「お帰りなさい元さん」

ここは俺の家ではない、しかし世界に俺の居場所は存在しなく、世界の外れにあるこの場所…管理者の世界こそが俺の帰る場所になる。

「ただいま…神さん」

「名前では呼んでくれないんですか？」

記憶は戻った、力も封印が解けた…今の俺は全盛期となんら変わらない姿形、力を持っている。

「…イシユタル、今まで迷惑をかけた」

「それが私と貴方の間での約束ですから、お気になさらず」

彼女は俺に再び封印をかけるのか聞いてくる…しかし、俺はそれを否定で答える。

なぜか？

簡単だよ。

もう俺は迷わないし、目的を見失わない。
彼女達と約束したからな…。

「悩んで、苦しんで、考え抜いて答えを出す。だからさ…咎を背負うさ」

「…わかりました。早速ですが、行つて頂きたい世界があります」

「勿論だ…そのために俺は存在する。…それで制約は？」

「E Xランクはなし、Aランクオーバーは2つ、Bランクオーバーは3つ、それ以下は4つです…力を抑えれば、制限もなくなります
が…」

「いや、それでも封印はいい…それで次の世界はどんな世界だ？」

俺の質問に彼女は手を頭にあて、情報を流し込む…。

そこに映し出されたモノは…。

「立派な魔法使い《マギステル・マギ》？ △ンドゥス・マギクス魔法世界？

この世界は魔法が存在するのか…いや、どちらかというところ魔術に近いな」

「魔術を行使する貴方としては、魔法とは言いたくないですか？」

「…いや、そこまで傲慢になるつもりは無いさ。世界が違つんだ概念も違つさ…しかし、マギステル・マギが…」

「どうしました？」

「いやエミヤが知ったら、涙を流して喜ぶだろうな…と思つてな」

「守護者ですか…」

「まあ、別にいいさ…それで、創造できる宝具なんだが決まった」

「…そうですね、ッ待つて下さい！」

俺が造り出そうとするとところに、彼女からの待ったが入った。
どうやら、向こうの世界の管理者から新しく追加の用件が入ったようだ。

曰く、従者も連れて行っていいとのこと…その代わり、制限が厳しくなる。

「従者…？ 英霊を連れて行ってもいいと？」

「はい…そのかわりですが、Aランクオーバー1つ、Bランクオーバー2つ、以下3つです」

「…厳しくないか？」

「…そうですね、しかし」

「まあ、あいつ等の内1人でも連れて行けるなら、仕事はかなり楽か…」

「行動の幅がかなり広がりますしね、それに英霊のもつ宝具はあなたの制限には入りませんし…」

俺は大して長考することも無く、考えをまとめた。

Aランクオーバーは1つのみ…となれば、広域撲滅にも適した存在…となれば。

「エミヤを呼ぶか…」

「彼をですか？ アルトリアさんやメデューサさんでは無くてですか？」

「俺としては彼女達にも会いたいが、仕事に私情は挟まんさ。制限のある俺としてはアイツの無限の投影は心強い…それにさ」

「？」

「あいつの目から見たその世界の正義の味方というのを知りたいしな」

俺の知る限りの最上級の正義が彼だ。

あまりにも正義であるために、その存在は過激で鮮烈で非情で悲しいものだ。

次の世界のマギステル・マギというものがあいつよりも素晴らしいが見比べたくもある。

「わかりました…それでは彼を呼びます」

俺と彼女の間には眩いまでの光で包まれた。

英霊の座への直接の交渉…。

成功するか？

「失敗しました」

「……」

失敗だった。

「理由を聞こうか」

「根源は今回の件に守護者を用いられたくないようです。あくまで正式な英霊で無いとダメなようです」

「…そうか、ならアルトリアを…いやメデューサを頼む」

「……分かりました」

彼女の視線が痛い。

言っておくが、俺は私情で彼女を選んだわけではないぞ。勿論、彼女に会いたいとは思った…でも私情ではない。

「…たぶん」

「私は気にしませんよ」

「……」

眩いまでの光の中から現れたのは妖艶で美しい紫のロングヘアの彼女だった。

「召喚に応じました…貴方が私のマスターですね、元」

「そうだ、久しぶり…でもないかメデューサ元気か？」

「はい、会いたかったですよ元」

嬉しいことを言ってくれる。

俺と彼女の微笑ましい再会に1人ジト目で見てくる管理者。

「…いいですよ、別に貴方が誰を選ぼうが私には関係ありませんよ」

「……いや、あの」

「関係ないですとも、ですからアルトリアさんに告げ口もしませんよ」

「…っう」

痛いところ突いてくる。

というか、告げ口は勘弁してくれ…。

「そういえば、座から呼ばれるときに彼女に会いましたよ」

「…え？」

「物凄く怒っているような顔でした」

「……」

うん…。

次に会うときは腹を括ろっ…。

「それでどの宝具を持って行くんですか？」

「ああそっだな…それじゃあ」

彼が創り出したのは、計6つの剣と盾、槍であった

絶世の名剣、熾天覆う七つの円環、ロー・アイアスルンテイング赤原獵犬、宝具の射出にも耐えられる洋弓、破戒すべき全ての符、ルールフウカキョウ干将・ぼくや莫耶の6つである。

「バランスがいいですね」

「俺としては対魔力として破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルグを持っていきたかったんだがな」

「今回は制限が厳しいですからね…」

「という訳だ。メデューサ…期待しても良いか？」

「勿論です元。私が愛した貴方のためにわが身はあるんですよ？」

ツク…嬉しいことを言ってくれる。

俺がメデューサと良い空気を作っていると…、

「元さん…」

「うん？」

「いつてらっしゃい…」

「「はい？」」

地面が開いて、体は綺麗にフェードアウトしていった。
最後に見たものは、恐ろしいまでに良い笑顔の管理者であった。

主人公設定&サーヴァント設定

名前：神堂^{シンドウ}元^{ハジメ}

肉体年齢：26歳

身長：195cm

体重：78kg

特技：空手、柔術、八極拳、システム、合気道を組み合わせた我流の体術 剣術 槍術 弓術

趣味：読書 歴史、神話の独学 鍛練

魔術回路：メイン120 サブ70

魔眼：流動の魔眼

人間の可能性を信じる事が出来たため、本当の力を取り戻した真の調整者。

調整者とは根源…根源の渦のアカシックレコードに記されているイレギュラーによる破滅の結果を正すものこと。

その力は、管理者群に帰属されており、彼らの要求の下行動する。

かつて、あらゆる魔法にも属さない異端の魔法をもって根源に至った存在を管理者が掬い取り調整の役を授けた。

しかし、その力はガイアやアラヤ、抑止力、英霊といった神秘に比べあまりに脆弱であり人間の域をでることがでない。

戦闘スタイルは剣による白兵戦がメインであり彼が用いる五大元素や様々な魔術はあくまで補助にすぎない。

義手に隠されているナイフ、アンカーや圧倒的な戦術幅、剣、槍、弓、体術を効果的に用いて身体的スペックの勝る英霊とも対等に渡り合うことが出来る。

神堂元が英霊達と同等の戦闘を演じられるのは、彼が生前に養ってきた圧倒的なまでの戦術幅と魔眼の力によるものが大きい。

魔術師の腕は超一流であり、最高の才をもち、彼が唯一の超一流となれる分野でもある。

また、世界から外れたことにより彼には起源は存在せず「」である。

身体スペック

筋力 B 耐久 B 敏捷 B 魔力 A + 幸運 C 宝具 E A + +

所持スキル一覧

流動の魔眼：あらゆるモノの流れを読むことが出来る魔眼。それは当人によってオン・オフが可能であり、視ようとすれば世界の流れ

…未来視も可能である。

しかし、それには脳に多大な負担がかかり、廃人になる可能性も高い。

これを用いて、彼は対人・対神秘に対する戦闘を優位に進めることが出来る。

創造：彼の魔法であり、第1～6までも属されない異端の魔法。調整者にまで昇華された最大の要因。

創造の名の通り、対象を理解さえすれば対象と全く変わらないレベルのモノを創れる。これによって本来ランクの下がる投影を彼はランクを下げることなく、完全な状態で造りだすことが出来る。

また、元は根源に至ったため魔力さえあれば新たな命もあまつさえ世界すら創りだす事ができる。

心眼（真）：Bランク

修練・経験の積み重ねによって得られる物。得られた情報と戦闘経験に基づく冷静な状況判断によって活路を見出すことができる。

カリスマ：Cランク

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力であり、Cランクは軍を十二分に率いることができる。

騎乗：Bランク

乗り物を乗りこなす能力であり、魔獣・聖獣ランク以外を乗りこなすことができるが竜種は範囲外である。

軍略：Bランク

多人数戦闘における戦術的直感能力。

圏境：Bランク

気を用いて周囲の状況を感じし、自らの存在を隠蔽する技法。極めれば天地と合一し、姿を自然に透け込ませることができる。

陣地作成：Aランク

魔術師固有のスキル。

戦闘続行：Bランク

決定的な致命傷を受けない限り生き延び、瀕死の傷を負ってなお戦闘可能とする。曰く、泥水啜っても生き延びる。

対魔力：Cランク

第二節以下の詠唱による魔術を無効化し、大魔術・儀礼呪法など大がかりな魔術は防げない。これは彼自身にあるモノではなく、彼の羽織っている黒のコートに施されている。

魔眼：A+ランク

流動の魔眼

魔術：A++ランク

魔術を修得していることを表し、A++ランクは魔法使いのレベル。

以上上記のスキルは全て、サーヴァントに与えられるものだが、彼もまた似て非なる存在のため、該当するスキルを記す。

しかし、この該当する殆どのものは生前の彼の行いから来るものである。

所有宝具一覧

デュランダル
絶世の名剣：A＋ランク

黄金の柄の中には、聖ピエール（聖ペテロ）の歯、聖バジル（バシリウス）の血、パリ市の守護聖人である聖ドニ（ディオニシウス）の毛髪、聖母マリアの衣服の一部と多くの聖遺物が納められているため、アンデットや吸血鬼、悪魔などの属性が『悪』の者に対しての概念武装ともなる。

また、”折れない剣”という概念の具現化により、いかなる手段によっても破壊されない。

熾天覆う《ロー・》七つの円環：アイアスB＋ランク

青銅の盾になめした牛皮を七枚敷き詰めた盾で、やはりトロイア戦争の英雄ヘクトールの投槍をただ一つ防いだことから、それ以後宝具に昇華した時には七つの花弁を展開し防御する。

投擲系統の武器：手から離れて攻撃されるものに対して絶対の防御を誇る。

フルンディング
赤原獵犬：Bランク

決して持ち主を裏切ることなく、刀剣は血をすすることに硬くなっていく。

敵を自動で感知し、追尾する機能を備えた宝具。

ベーオウルフの攻撃を相手が回避しても、自動的に軌道が修正されるため、ほぼ確実に命中する。

投擲した場合にも同様の効果を発揮し、元は弓を用いて剣としてだけではなく、矢としても用いる。

宝具の射出にも耐えられる洋弓：Dランク

本来、宝具を投擲するさいは弓に絶大な負担がかかるため、並みの弓ではもたない。

しかし、これは元が宝具の投擲にも耐えられるように骨子をより強度にしたものである。

丈夫であることを除けば、神秘性は殆ど無い。

破戒すべき《ルール》全ての符：フレイカーCランク

『裏切りの魔女』の神性を具現化させた至高の対魔術兵装である。刃としての切れ味は少し良い程度だが、ありとあらゆる魔術・魔力を無効化し、呪いや契約を破戒できる。

干将・莫耶：かんしやう げふCランク

持ち主のステータスをアップする効果を持つほか、双剣が離れている場合でも互いを引き合うという性質を持っている。

しかし、それを除けば投影における魔力効率のいい双剣であること以外、特徴は無い。

だが、人の鍛えし宝具としては最高ランクに位置する。（それでもCランク）

煉獄刀・紅蓮：レンゴクトウ グレン- - ランク（B - ランク相当）

再世者である付喪海から受け取った異界における鬼神の一振り。

真紅の刀身が指し示すは圧倒的な破壊である。

血肉を吸えば吸うほど、その切れ味は鋭くなり刀身は赤く染まっていく。

本刀剣は再世者から受け取ったものであり、世界からの制限は元にかからないため、彼の固有武装となっている。

上記のレンゴクトウ・グレンを除けば、破損・欠損すれば新たに投
影（創造）することが出来る。

普段はレンゴクトウ・グレンを除いて、手元には無い。
必要となれば順次、創造、破棄を繰り返す。

名前：メデューサ

肉体年齢：24歳

身長：172cm

体重：57kg

スリーサイズ：B88・W56・H84（cm）

特技：乗馬 軽業 ストーカー

趣味：読書 お酒

属性：混沌・善

魔眼：石化の魔眼キュベレイ

桜に召喚されて、令呪によって慎二と仮契約した騎兵の英霊。その後、セイバーに敗れた際、神堂元に令呪ごと譲渡される。

女性の英霊で、ライダーの名の通り高い騎乗能力と機動力を持ち、豊富かつ強力な宝具を用いる。

常に魔眼を封じるための目隠しを装着しているが、後に近衛の遺産である魔眼封じの眼鏡を受け取る。

武器は鎖の付いた鉄杭を用いた機動性を生かした変則的な戦いを得意とする。

長身で女神にも例えられる妖艶な美貌と、それに似つかわしくない奥ゆかしく丁寧な性格（元曰く「可愛らしい」）で近寄りがたいものはない。

元が愛した数少ない女性の1人であり、彼女もまた彼に対して感謝の念と好意を持っている。

（元が愛した女性の他にはアルトリア、蒼崎青子がいる）

生前は、女神アテーナーも嫉妬するほどの美貌と美しい髪を持つために怒りを買ひ、形なき島に姉のステンノ、エウリュアレ共々追放された。

しかし、それでも英雄達による討伐はやむことは無く、姉達を守るために彼らを殺し続けた。

血を吸い続けたことで崩壊し、最後は魔物『ゴルゴン』と成り果て最後はペルセウスによって討伐されてしまった。

誰もが羨む美貌とは裏腹に彼女にとっての美しさの基準は『小さくて可愛い』であるため、自分の容姿はあまり、好ましくは無い。なお、求愛してくる海の神ポセイドンには鬱陶しく思っていたようだ。

身体スペック

間桐桜	筋力 B	耐久 D	敏捷 A	魔力 B	幸運 E	宝具 A +
神堂元	筋力 B	耐久 C	敏捷 A	魔力 B +	幸運 D	宝具 A +

所有スキル一覧

魔眼：A + ランク
最高レベルの魔眼・キュベレイを保有。対魔力が低い者はほぼ無条件で石化されてしまう。

高い魔力を持つものでも、全能力値がワンランク低下する“重圧”をかけられてしまう。

単独行動：Cランク

マスター（元）からの魔力が絶たれても現界していられる能力でランクCにおいては、1日程度存在し行動可能。

怪力：Bランク

一時的に筋力を増幅させる、魔物・魔獣が保有する能力で発動中は筋力をワンランク上昇させる。

神性：Eランク

ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。魔物としてのランクが上がったことでここまで退化してしまっている。

対魔力：Bランク

発動における詠唱が三節以下の魔術を無効化する。大魔術・儀礼呪法を用いても傷つけることは難しい。魔力を用いた攻撃には圧倒的である。

騎乗：A＋ランク

騎乗の才能。獣であれば幻想種（聖獣・神獣）すら乗りこなせる。ただし、竜種は該当しない。

ブラッドフォート

アンドロメダ

他者封印・鮮血神殿：Bランク

結界内部に入った人間を融解し、血液の形で魔力へと還元して、使

用者が吸収する。

形はドーム状をしており、端から見れば巨大な眼球に取り込まれたように見える。ただし、結界外からは敵に察知されないために、そのようには見えないようになっていいる。土地の霊脈を傷つけるため、同一の場所に連続して施すのは不向き。

魔力の供給として用いるが、魔力のある人間であれば体調不良程度でとどまるため、魔術師、魔法使いには効果がない。

ブレーカー ゴルゴーン
自己封印・暗黒神殿：Cランク

対象に絶望と歓喜の混ざった悪夢を見せ、その力が外界へ出て行くことを封じる結界。普段はライダーのバイザーとして使用しされており、自身のキュベレイを封じている。

だが、元から魔眼封じの眼鏡を受け取った後は使用する機会は殆ど無い。

当然ながら、自身以外にも使用できるため、この宝具の見せる夢を媒介に、ライダーは対象の人間から吸精することも可能。（淫夢）

ベルレフオーン
騎英の手綱：A＋ランク

あらゆる乗り物を御する黄金の鞭と手綱。

幻想種であっても、この宝具でいうことを聞かせられるようになる。

また、乗ったものの能力を向上させる効果もある。

主に召喚したペガサスに使用し、真名開放すれば、限界を取っ払って時速400～500kmという猛スピードで相手に向かって呐喊する。

その威力は城壁が衝突するに等しく、エクスカリバーにも匹敵する威力を持つ。

第一話 I c a n · t f l y !

本日は晴天なのだろう、雲ひとつない空に映し出されるのは瞬く星々が美しく輝いている。

隣には、男は彼が愛した女性メドゥーサが共に風を切っている。

「なあ、メドゥーサ」

「なんですか？ 元…」

「星が綺麗だな」

「ロマンチックなことを言いますね… 本当にあなたは変わりましたね」

「…こんな俺は嫌いかな？」

小さく彼女は笑う。

その仕草の一つ一つが美しく、愛らしく、愛おしく感じた。

恐らく、同姓である女性ですらその仕草には見惚れるだろう。

「いいえ…好ましく思えますよ。初めて会ったときからも前に会った時よりも好ましく思います」

好ましく思うか…こいつらしい言い方だと思う。
でも、そこに惹かれたのかもな…。

「それにしても…」

「…ん？」

「いつまで落ちるのでしょうか」

風を切りながらの落下。

世界の外れから落とされた先は空の遥か上空であった。

だからだろうか、いつもよりも星が綺麗に見える。

「…地面に衝くまでじゃないか？」

「私はともかく、元は死にますよね？」

「……確実に」

上空5000mからのパラシュートなしでのスカイダイビング中なのだ。

…ああ、風が痛い。

「季節は3月くらいか」

「場所は麻帆良と言いましたか？」

「イシュタルからの情報はそうだったな、このまま落ちれば間違いなく麻帆良学園という敷地内に着くだろう」

地上まで500mを切ったところでも彼らの心持は全く変わらない。その胆力は英霊であるメドゥーサはともかく…人間となんら変わらない元がこつも落ち着いていられるのは、納得がいかないものがある。

彼は自分はいくまで人間だと言い切るだろうが、この時点で人をやめているだろう。

「…うん？ 地面が見えてきたな」

「そうですね、それでどうするんです？」

彼はその疑問に彼女を抱きかかえるように…所謂、お姫様抱っこの状態である。

「元？」

「少し我慢してくれ」

彼女に微笑みながらそういう彼の周りの大気は激しく渦巻く、それは五大元素のうちの『空』と『風』である。

地面までは50mである。

その場所から、彼らは静かに地面に降り立つ。

「…死ななかつただろ？」

「ふふ…そうですね」

男と女その会話内容はともかく、その空気は惚気ているカップルのものである。

だが、その微笑ましい？光景を壊すものがある。

「なあ、兄ちゃん姉ちゃんよ」

「「ん（はい？）？」」

「こんなところで惚気んなよ」

周りを見渡せば、そこには化生の類がうじゃうじゃしていた。
烏頭や関西弁を話す鬼が20を超えていた。

「…全く、イシユタルも面倒な時に送ってくれた」

「女性の嫉妬は怖い…ということですよ」

「…フツ、メドゥーサが言くと説得力があるな」

「ふふ…経験談ですよ」

まるで、こちらを異物でも視るようにしている化生の類。
それもそうだろう、彼らの登場のしかた、そしてこの態度は”普通
ではない”のだ。

「一つ聞きたい。 その鬼」

「なんや？」

「ここは麻帆良であっているな？」

「そうや」

「それで、お前らは敵か…？」

その答えに彼らは歪な笑みで返した。

鬼の笑顔など視たくも無いというのが彼の正直な答えだった。

「わて等は召喚されただけや、まあ主の目的からみたら…麻帆良の敵やろうな」

「そうか…メドゥーサ」

「わかりました」

「……！？」

彼らを包んでいた化生たちは目を疑った。

今まで獲物だと思っていた、目の前の男女の空気が一転して変わったのだ。

その空気は普通の人間からは発せられない殺気であった。

「くっ（なんや、こいつら！）」

いや、もはやここまでくれば覇気に近いだろう。

「悪いが消えろ」

「いきます…！」

彼らの生はそこで終わった。

あいつらはなんだ？

一人は黒のパンツに黒のシャツ、黒のコートに真っ黒な髪と肌を除けば全身が黒だった。

それを除けば、普通の人間に見える。

だが、もう1人のでかい女はなんだ…。

「茶々丸…あれはなんだ」

「分析の結果から、魔力と測定不能の物質で形成している人の形をした何かです」

人の形をした何か…だと？

そもそも私達がここにいるのは侵入者を迎撃に出るためだった。今までと同じ、雑魚どもだと思った。

爺からの知らせにうんざりしながら茶々丸と向かった。

予想通り、いたのは数が多いがいつもの鬼や烏頭に狐女のいつもの面子であった。

しかし、その中心にいたのはいつもとは違う見たことも無い男と女だった。

「あいつらも敵か？」

「敵かは分かりませんが、どうやらアノ人たちは彼らの敵のようです」

あいつらも侵入者には変わりはない。

金髪の少女は元とメドゥーサを侵入した際に鉢合わせしたと思ったのだろう。

現にその通りなのだが、目的はまるっきり違った。

「マスター、戦闘に入るようです」

20対2…その戦力比から見ても彼らの負けは目に見えていた。だから、彼女はマスターと呼ぶ少女に戦闘が終わるまで待機を命じた。

少し手でも雑魚共を減らして、くたばってくれることを望んだ。

だが、現実は違った…。

「…なんだ、これは」

…一方的な殺戮でできた。

なんだ、この光景は…。

少し怪しくはあったが目の前にいた男女はただの人間のはずだ…なのに。

「強化をかける必要も無い…！」

「元…生き生きしてますね」

男の持つ深紅の刀は血を吸うごとに喜びの咆哮を上げるかのごとく、次々に仲間達を切り捨てていく。

刀身の長さからか、その円はそれほど大きくは無い。
振るわれる刃の軌跡は大きくはないが綺麗な紅の円を描いていた。

その円はつまりは刃の届く長さでもある。

円が無骨な首を通り過ぎる。

その刹那、首は綺麗にずれ落ちた。

斬られた側としてはいつ斬られたかもわからないだろう。

混戦の中、元の後ろから大きな一撃が入ろうとしている。

しかし、その一撃は決して届くことなく、メドゥーサの鉄杭に阻まれ、身体をそのまま貫かれる。

何という光景だろうか。

混戦の中、彼らには傷ひとつ無く、対して化生の数は一つまた一つと減っていく。

最初こそ、20いた存在は今では5つにまで減っている。

「…お前は何なんだ」

「うん？ 人間だが？」

男は息一つ乱すことなく、簡単に返した。

だが、その答えに誰が信じられようか…。

少なくともこの光景を見ているものには信じられるはずにはなかった。

「元は人間かもしれませんが、私は人間ではありませんよ」

「そういう考えならば、俺も人ではないだろう？」

「ふふ、そうかもしれませんがね」

馬鹿にしている。

今の今まで殺し合いを繰り返していた者たちの会話とは思えないまでの和やかな声色だった。

息も感情も乱すことなく、ここまでの光景を作りあげていた。

「貴様等…ふざけているのか！」

「まさかな…。ただ、拍子抜けしただけさ…化生の存在ゆえに少しでも楽しめるかと思っただが…存外そうでもなかった」

「簡単に済むのなら、それでもいいのでは？」

「…まあ、そうなんだがな…こいつがさ」

舐められている。

残ったのは5体…20でも敵わなかったものが5で敵うはずもない。しかし、このままで済ませたくはなかった。

「……」

「まあ、舐められっぱなしってのもなあ…」

「いっちょ…やるか？」

「舐めんなよ…」

「殺す…！」

先ほどまでに無い、殺気が化生から流れ出る。

それもそうだろう…ここまで人間に舐められて黙っていられるほど彼らは腐ってはいなかった。

「いい殺気だ…それでこそ殺す価値がある。…こちらを殺す気もないくせに本気でやってもらおうなどと思うなよ？ 化生共…！」

「やってやらあ…！」

「」「」「うらあああ…！」」「」「」

「来い…！」

いわば、彼のやっていた事は挑発だったのだ。
彼らの本気を引き出すための…。

「…はあ」

彼の性分を理解している彼女も溜息を洩らす。
呆れているのか、見放しての溜息なのかは分からない。
しかし、それはどちらでもない。

「（…まあ、元はこうでなくては）」

本当に彼女は彼のことを理解している。

金髪の少女は言葉を失った。

正体不明の女も男もここまでとは思わなかった。

端から見ていてもわかる…奴等は戦いなれすぎている。

年齢は20代半ばに見える…だが、その年齢とは不釣り合いすぎるまでの戦いようだ。

恐ろしかった。

戦いぶりも、何もかもが。

しかも、男は魔力も気も纏わせることなく戦っている。

異常すぎる…剣技は確かに目を張るものがある。

葛葉や桜咲よりは腕は上だろう…だが、圧倒的に上ではない。

なのに、何故こうも圧倒的なまでに戦えるのか…。

「茶々丸」

「彼の反応スピードは確かに高いです、剣速も葛葉様や桜咲様よりも上でしょう…しかし、目に張るものはそこではありません」

「戦術幅か？」

「はい。…ですが、驚くべきところはそこではありません」

「どういうことだ？」

「逐一変わる戦いの場でその場に最も適した戦術を的確に最速で選択しているのです」

茶々丸に言われて、男の動きをしてみる。

…確かに、言われてみればそうだ。

動きが逐一変わるのだ。

奴等を斬ったと思えば、その瞬間で動きの色が全く変わるのだ。その戦い方はまるで同一人物のソレとは思わない。

一体どれだけの戦術をもつて、体得しているのだろうか。

剣を使ったかと思えば、体術で相手を絡めとり動きを拘束し、首の骨をはずし命を奪い取る。

恐ろしい。

この身は魔力を封じられている。

このまま男との戦闘に入れば、間違いなく破れるだろう。

…だが、封印がとければ男に勝てるのか？

圧倒的な魔法で敵を粉碎し、叩き落す。

それが、アノ男に通じるのか？

「…ッ！」

私としたことが…闇の福音、不死の魔法使いと恐れられた私が恐れ
ているだと！

ありえない…だが、勝てるイメージが浮かばない……。

必死に頭をふり嫌なイメージを拭い去ろうとする少女とは裏腹に隣にいる少女は彼らの戦闘データを冷静にとっている。

「マスター」

「ツな、なんだ」

不意に呼ばれ、声が上ずってしまった。

なんと情けないことか…。

悪の象徴として恐れられた彼女は今では唯の少女に成り下がっていた。

だが、そんな彼女の気持ちとは裏腹に茶々丸と呼ばれていた彼女は冷静に彼らの異常性を告げる。

「男性の方は確かに恐ろしいですが、私には女性の方のほうが異常に思えるのです」

…どういうことだ？

確かに、女は人間とは思えない。

しかし、ソレほどまでに脅威とは思えない。

「彼女の俊敏性が異常なのです…魔力による強化も気による強化も見受けられないのです」

「…確かにな。だが、あの女は人間ではないのだから人と同一ではないだろう」

「そうではないのです」

「？」

「人間の形をしている以上、動きに限界はあります…。しかし、あの方のソレはその限界を大きく超えているのです」

「…なんだと？」

「仮に人間の女性ならば、筋力、反応スピード、俊敏性、あらゆる面が規格外なのです」

言われて、女の動きに注目してみる。
今まで男のほうに注目していたせいもあり、女のほうの異常性に気づかなかったのだ。

…なんだ、あの女は。
重力を感じさせない動き、瞬発力…確かに異常だ。
男の異常性はその戦い方。
しかし、女の異常性はその動きだ。

目の前に迫った凶刃を何事も無いように避ける。
言葉にすれば、可笑しくも無いことなのだが、目にしたものだけが分かる。

混戦の中、高速で動く得物を綺麗に避けていく。
言葉には出来ない。
言葉には出来ないのだ。

出来るはずが無い。
もし、できるのならば、その人間は表現力豊かな…そう芥川賞ですら簡単に得られるだろう。

「茶々丸…」

「はい」

「タカミチや他の魔法先生共を呼んでおけ…こいつは私達の手には負えん」

茶々丸は静かに頷き、増援の連絡をとる。

この瞬間に闇の福音…エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル
の負けは確定したのだ。

一個人として、彼女は自分の負けを認めた…。

第二話 麻帆良との出会い

「あい、わかった…すぐに向かわせよう」

部屋に静かに響いた電話の会話は静かに終わった。

それは麻帆良学園の長…学園最強の魔法使いであり、関東魔法協会の理事も務めるご老体である。

その姿からは見えない力をその身に宿しているのだ。

「（まさか、エヴァから増援の要請があるとはのお…）」

最初その通信を聞いた時は我が耳を疑った。

ワシの知るエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルという少女は真祖と呼ばれる600年を生きた最強の吸血鬼であり、最強の魔法使いを自称するほどの使い手である。

性格も自らの負けを大人しく認めるほど大人しいものではなく、どちらかというと唯我独尊を地でいくようなものだ。

それが、戦いもせずに増援を求める…。

「恐ろしいのお…」

彼は再び電話に手を伸ばし、魔法先生たちと一部の魔法生徒に連絡をとる。

相手のほうもまさか、増援を求められるとは思ってもしなかったように、声に揺れが見えた。

「それでは高畑先生…頼みますぞ」

静かに受話器をおいて、溜息を吐く…。

「（まさかネギくんが来て一月でこうも厄介なことに巻き込まれるとはのお…、いや、ネギくんが目的かの？）」

彼の心労は淡々と募っていく。

「メドウス…怪我はなかったか？」

「はい。元もお怪我はありませんか？」

「フツ…この程度で怪我を負うほど軟な鍛え方はしてないよ。
…
そこの二人出てきたらどうだ？」

「「!？」」

まさか、気づかれていたのか！

こちらは完全に気配を消していたはずだ。

確かに、認識遮断の魔法は施してはいなかった。

だが、こうまで簡単に見破られるとは思わなかった。

俺達から少し離れたところにある林の中から二人の少女が出てきた。

1人は10歳、もう1人は15、6歳か？

どちらにしても、兩人とも人間ではあるまい。

しかも、片方は…、

「そちらの少女は吸血鬼か…？」

「そうだ」

あくまで気丈でいなくてはいけない。

増援の少なくともタカミチたちが来るまでは、時間をかせがねば…。

…いや、なにより私ともあろう存在がこうも後ろ向きな考えをしなくてはいけないのが腹が立つ。

「私が闇の福音と恐れられる真祖の吸血鬼だ！」

私の口上に呆気にとられるように二人は呆けている。

なんだ？ 私は可笑しなことを言ったか？

「真祖…？ 貴様がか？」

「そうだ、何か文句があるのか」

「…メドゥーサ、真祖に見えるか？」

「…なんだと？」

「全く見えませんね」

「…イラッ。」

この女…少し背が高く、胸がでかいからって…。

「まあ世界が変われば、真祖の定義も変わるか…」

「そうですね…。それに真祖がこんなに可愛いはずがないです
し」

「ほお…」

ダメだ…殺そう。

「マスター…」

「貴様等…」

「「なんだ？（なんです？）」「」

「死ねええ！！」

こうして、最強の魔法使いと調整者、英霊の戦いが始まった。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック」

ディレイ・スベル
遅延呪文という技巧を遣い、詠唱を完了させた魔法を待機させる。

「茶々丸！」

「ロケットパンチ」

「なっ！？」

男は両腕の前腕部の有線式の射出パンチ…所謂ロケットパンチに驚

いているようだ。

確かに何も知らない人間がこれを目にすれば、驚きもするだろう。

しかし、男の驚きは一瞬で終わり、放たれたパンチは彼が蹴り上げることで防がれる。

だが、それが隙になる。

「魔法の矢29！」

魔力によって攻勢された29本の矢が放たれる。
しかし、それは彼に届くことはなかった。

――ロー・アイアス――

それは7枚の花弁のごとき盾によって完全に防がれていた。
魔法の矢とはいえ、それは投擲である。

つまりはこの盾には無意味なのだ。

投擲でこの盾を破るのであれば、それこそゲイ・ボルグ並みの神秘
を用いなければ、不可能である。

「クソ……！」

「フッ……」

何なんだ、あの盾は！

エヴァンジュリンは訳がわからなかった。

何も無い空間から、急に盾が現われたのだ。

「（アーティファクトか？）」

「思考に陥っている場合か？」

「ッ!？」

彼女は寸でのところで身体をそらせる、慣性の法則に従い、その場に残った僅かな前髪は斬り散らばった。

だが、それで追撃の手をやめるほど元は甘くは無い。

前動作の無い剣筋は彼女の命を刈り取るうとしている。

「マスター！」

「チイツ！」

しかし、それは男と女の間に入った光の筋によって阻まれた。どうやら、眼球部からのレーザー光線なのだろう。

「ロケットパンチに光学兵器…まるでアニメだな。大した科学力だ」

「お褒めに預かり光栄です」

「それに礼儀作法もシツカリしている…短気な主に比べて有能だな」

「チツ…良く喋る口だ！ リク・ラク・ラ・ラック・ラ「私を忘れてませんか？」ぬう!？」

魔法の作動キーなのだろう…彼女の呪文は最後まで紡がれること無く、メドゥーサの鉄杭に妨げられる。

当たりこそしなかったものの、彼女達は追い込まれていた。

負傷はしていない。

だが、追い込まれている。

「（タカミチ達はなにをしている！）」

彼女は憤っていた。

増援が遅いのだ。

しかし、彼女が増援を要求してから5分も経っていない。

張り詰められた空間が時間を歪めているのかと思うほどに時間の流れが遅く感じた。

「マスター……」

「茶々丸、情けない声を出すな」

「……これではまるで苛めているみたいですね」

「はあ……全くだ」

情けなかった。

ここまで追い込まれても相手は本気のほの時も出していない。

対して、こちらは息も絶え絶えだ。

ここまでくれば、怒りもなく、すっきりもせず、情けなかった。

「クウ……」

強く拳を握る。

私はこんなにも弱かったのか。

闇の福音とまで恐れられた私はこんなわけも分からん奴等に負ける

のか…。

その光景に元は溜息をはいて、深紅の刀身を鞘に戻した。

「…え？」

「どういっつもりで？」

「そちらの戦意はなくなったと判断したまでだ。ならば、こちらが剣を持つ必要はあるまい」

「どこまで…どこまで私等を馬鹿にすれば気が済む！！」

いつそのこと殺してくれたほうがマシにも思えた。

しかし、この身は不死の身。

並大抵のことでは死ぬことは無い。

「馬鹿にはしれないさ…俺らには元々戦う気はないのだからな」

「それはどういう「エヴァ！」タカミチ！」

そこに、ようやく増援が来た。

「エヴァ、無事かい！？」

「あ、ああ…」

エヴァと呼ばれる少女と茶々丸と呼ばれる少女は一気にこちらとの距離をとり、タカミチと呼ばれていた増援達と合流した。

「絡繰さんも無事ですか？」

「桜咲さま…ご心配かけました」

恐らくは魔法使いの増援…中には中学生くらいの背丈の少女も何人かいる。

なるほど…俺達がいた世界よりは神秘に対する姿勢が緩いのか…。

「さて、僕の元生徒がお世話になったようだね」

「（この男…タカミチといったか。デキルな…）」

「高畑先生…」

「分かっています、ガンドルフィーニ先生…。それじゃあ、侵入者の二人…準備はいいかい？」

「タカミチ…気をつける。あいつ等2人とはいえ、かなりやるぞ」

彼らは杖を取り出し、魔法の始動キーを唱える…。

いつ、第二ラウンドの戦闘が始まるうとしていたが…、

「…元」

「分かっている」

彼らは短いやり取りで、一つの答えを導き出した。

それはなんとも呆気ないものであった。

その姿は両手を挙げての…。

「降参だ（です）」

「はい？」

戦いは呆気なく、格好悪く終わった。

第三話 化かし合い

目の前には魔法使いたちが雁首並べて、口を半開きで佇んでいる。まあ、分からなくはない。

これから戦闘だというときにイキナリの降参宣言…。

「ふ、ふざけているのか！ 貴様等は！」

眼鏡をかけた黒人男性のたらこ唇と角刈りが特徴な男が吼えている。全く、鼓膜が痛い。

「ふざけているつもりはありません。そもそもこちらには最初から交戦する意志はないのですから」

「いきなり、仕掛けてきたのはその少女だろうが」

俺達の発言で魔法使いどもは小さき少女に視線をずらす。あまりに予想外の発言に少女は幼女と呼ばれたことに怒りたいのだろうが、そうもいかない。

「俺達は事故でこの地に来てしまった。勝手に敷地に入っただけだ。申し訳ないと思う。だが、来てイキナリ化生に襲われたのかと思えば、次はあなた方だ…少しはこちらの話も聞いていただきたい」

「し、しかし…」

「私達には交戦の意志はありません。出来ればその杖を下ろしていただきたいのです」

「ぬ、ぬう…」

黒人の男は言いよんどってしまった。

確かに彼らの視点から見れば、俺達は不法侵入者である。

しかし、だからといって問答無用で攻撃を加えていいはずがない。

それは彼らがマジステル・マギを自称しているはずの魔法使いだからだ。

「先生方！ 耳を傾ける必要なんてありません！」

そこには綺麗なブロンドのロングヘアの少女がいた。

恐らくは高校生程度の年齢だろう。

「不法侵入者の言うことなど信じてはいけませんわ！」

なるほど…、確かにそのとおりだ。

俺が彼らの立場ならば、その通りにするだろうな。

「君はマジステル・マギを目指しているのか？」

「当たり前です！ 魔法使いとはそういうものです」

「ふむ…ならば、君は立派な魔法使いなどにはなれないな」

「侮辱してますのー！」

「いいや、少なくとも自分の価値観のみに固執し、自ら話し合いの場を蹴り飛ばすような愚鈍な存在が立派な魔法使いなどになれるはずが無いだろう？」

「グッ…」

「魔法が使いたいただけの馬鹿は馬に蹴られて死ぬ」

「そ、そこまで言われる謂れはありません!」

全くその通りだと思う。

「元、喧嘩をうってどうするんですか」

「…すまん、ついな。 エミヤを知っているこちらとしてはアノ程度で正義を語って欲しくはなかったのだな」

彼の知る最上級の正義の味方はエミヤシロウなのだ…つまりはこちらの世界の正義の味方はマギステル・マギなのだ。
だから、その程度の認識で正義など語っては欲しくなかった。

正直、苛立ちがした。

「シロウですか…いえ、アーチャーですかね」

「どちらもだよ…」

「何の話をしている?」

こちらの会話に怪訝な表情で伺ってくるエヴァンジェリン。
おっと…話がずれたな。

「申し訳ないが、最高責任者にあわせてもらえないか?」

「は？」

「元？」

「このまま睨みあつていても時間の無駄だろう…それに夜も深い。こちらには女性もいるんだ、それはそちらも同じだろう？」

「何を言っているんだい？」

「夜更かしは美容の敵ってな…」

「プ…」

小さな少女が笑いを洩らす。

それに周りは何があつたんだという怪訝な視線を彼女に送る。他の人間にとっては俺のこれは軽口にすぎないからだ。

「ククク……フハ！ アハハハハハハハハハハっ！！！」

ここまでコケにされれば一層気持ちがいい。

先ほどまで感じていた不快感も情けなさも綺麗になくなった。負けたのは私が弱かったただけなんだ。

「いいだろう、爺のところには私が案内してやる」

「エヴァー！？」

「「「エヴァンジェリン（さん）！？」「」「」

「大丈夫だ、こいつ等は安全だよ。わざわざ呼んで悪かったな」

「フッ…」

「……」

全く、ここまで事態を面倒にした張本人が何を言っているか。
だが、ありがたい反応だ。

「では連れていってもらえるかな吸血鬼のお嬢さん？」

「お嬢さんは止める。 これでも600年生きているんな」

「それは失礼したMs・「エヴァンジェリンだ」Ms・エヴァンジェリン」

「お前等の名前は？」

「度々失礼した。 俺の名前は神堂元という」

「私はメドゥーサといいます」

「元にメドゥーサ…タカミチお前も来い！ 茶々丸は先に戻ってていいぞ」

俺達は楽しそうに笑うエヴァンジェリンの後を着いて行っただ。

後に残るのは慥然と立ち尽くしたかわいそうな人たちだけであつた。

「え」と…皆、解散」

ソレだけを言い残し、タカミチと呼ばれていた男もその場を後にした。

「「「「」」」」」

「…え〜とお姉様」

「愛衣、帰って寝るわよ」

寂しく、風が流れた。

「ふむ、それで君達は何者かね？」

俺達が案内されたのは、確かに麻帆良学園理事長のいる場所だった

はず。

だが、目の前にいるのは…。

「エヴァンジェリン、誰が化生に会わせると言った」

「ふぉ！？」

「残念だが、こんなんでも人間だ」

「…なんだと」

「まさか、こんな形の人間がいるとは蔵現以上に可笑しな人間がいるとは思いませんでした」

「会って、いきなりその発言はひどいのではないかい？」

「そうだ、こんなんでも辛うじて人間だ」

「エヴァよ…お主が一番ひどいのぉ」

メソメソと業とらしく泣く化生…もとい理事長。
うざったいな…。

「俺の名前は神堂元という、こちらがメドゥーサ俺の人生のパートナーだ」

「初めまして、メドゥーサといいます。 人生のパートナーかは分かりませんが恋仲であることには変わりません」

「うぬう…こちらを無視しながらの自己紹介に惚気を入れるとはや

るのお」

「惚気たつもりはない。あくまで事実しか言っていない」

「まあよい。それでお主らは何の目的でこの麻帆良に訪れたのかの？」

やっと本題にはいったか。

タカミチとエヴァンジェリンは目的に機敏に反応を示した。

タカミチという男はこちらを全く信用していない。

エヴァンジェリンはこちらを認めながらもやはり信用しきっているとまでは行っていない。

会って1時間も経っていないのだから、それ以上をもとめるのは酷であろう。

「目的か…その前に、あなた方は魔術というものを知っているか？」

「魔法とは違うのかの？」

「英霊は？」

「知らないの」

「根源は？」

「聞いたことがないのう」

「調整者は？」

「知らな…いや、聞いたことがある」

調整は知っているか…いや、俺達の認識している調整者と同一の存在かは分らない。

「若い頃のどこで聞いたか覚えてはいないが、確か破界の前触れとして現われ、人々と世界を救うと…な」

ふむ…多少の認識の違いはあるが、恐らくは正解かな？

「元…」

「ああ…まずは目的の前に俺達のことを説明させてもらっ」

こうして、化生紛いの理事長との化かしあいが始まった。

「…異世界？」

「そうだ、俺たちはこの世界の人間ではない」

「魔法世界ではなくてかい？」

「魔法世界のことではない、謂わば並行異世界だ」
△ンドウス・マギクス

近衛近右衛門とタカミチ・T・高畑、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは何を言っているんだというような顔をしている。
…まあ、いきなりこんなことを言われてもこうなるよな、こいつがさ。

「元…証拠はあるのか？」

「証拠…ねえ。お前にはとっくに見せているはずだが？」

「なんだと？」

「俺は君たちのいう魔法使いではない、あくまで魔術使いだ」

「魔術…？ 先ほどもでてきたが魔法とは違うのかの？」

「神秘で魔力を使うという点ならば同じではあるが、概念が違う」

「概念かい？」

「そうだ。魔術とは人為的に奇跡・神秘を再現する行為の総称であり、魔法から格下げされたものの事を言う」

「格下げとはどういう意味だ？」

「そもそも魔法とは本当の意味で“奇跡”と呼べる現象を引き起こす神秘を指す。その時代の文明の力：つまりは科学だな。いかに資金、時間を注ぎ込もうとも実現不可能な“結果”をもたらす物のことだ」

「なるほどな…時間が経てば科学力はあがる、それ故に時間と文明の発展と共に魔法から魔術に格下げされるわけか」

「理解が早くて助かる。そして、先ほど言った証拠とは魔術の中にある投影というものののだが…」

「投影？」

「…元、見せたもののほうが早いと思いますよ」

「そうだな…先ほども言ったが既にエヴァンジェリンには見せている故に…」

- - - 創造・開始 - - -

創造の理念を鑑定…、
基本となる骨子を想定…、
構成された材質を複製…、
製作に及ぶ技術を模倣…、

成長に至る経験に共感…、
蓄積された年月の再現…完了。

その手に現れたのは圧倒的な神秘に包まれた聖剣が現われた。
その中に内包されている魔力の量に驚いた。

「な、なんだそれは」

「不滅の刃の意をもつ英雄オーランが有し聖剣デュランダル、先に
見せた盾はアイアスの盾だ」

「デュランダルだ！？ それにアイアスの盾って、あれかギリシア
神話に出てくるヘクトールのあれか！？」

その答えに俺は静かに頷いて肯定する。

やはり、基本な歴史はこちらもあちらも変わらないか…やはり、根
源の影響下の中にあるか…。

「…なるほどの、こちらの魔法では確かにこれほどの魔力を内包し
た剣など造り出すことは出来ん…じゃが、とても君の言う魔術とは
かけ離れていると思うのだがのお？」

「ほお…」

「どういうことです？」

「元くんが言っておつたろ？ 文明の力…科学の力で実現可能なも
のを魔術という…じゃが、とても科学の力ではその剣は作り出せ
ると思えないじゃ」

「大したものだ…この短時間で理解するとは。貴方が思っている通り、これは俺達概念で言う魔法だ」

「つまりは、君も魔法使いということかの？」

「そうだ、俺達のいた世界の6人しかいない魔法使いのうちの一人が俺だ…。本来、投影はランクダウンされて造り出される。しかし、俺の投影は魔法の影響でランクダウンされず、十全の状態で創り出すことができる」

「創り出すか…つまり、貴様の魔法は創造といったところか？」

「いやはや…お前も優秀だな、その通りだ。俺は理解したものを魔力によつて、完璧な状態で創り出せる…応用を利かせれば、理論はあつても基礎科学力が足りなくて作るができないモノも創り出す事ができる」

部屋は沈黙で包まれた…少し見せすぎたか？

「（元、見せすぎです。下手をすれば…）」

「（ああ…排除されるかもな）」

「（なのに、何故そこまで落ち着いているのです？）」

「（忘れたのか？ 曲りなりでもこの世界の魔法使いは正義を自称しているのだ…少なくともいきなり排除とはならんと信じている）」

「（信じている…ですか。やはり、あなたは変わりましたね）」

それに俺はニヒルな笑みで答える。
そうだな、信じるしかあるまい。

この世界の歪みがなんなのかは分からないが、個人だけではとてもではないが対応が出来ないのも事実だ。
過ちを繰り返すわけにはいかない。

「いいじやろう、君達を信じよう」

「いいのですか？」

「いいんじゃないよ…もし、こちらに敵対する気があるんならワシ等など簡単に殺されとるわい。　そうじやろエヴァ？」

「悔しいがな、封印状態の私では手が出ん…いや、封印がなくなとも…」

「（そこまでの相手か…）」

タカミチは男の身なりを見る。

初めて見たときは夜の暗闇の中であつたせいか、良くはわからなかったが…確かに良く鍛えられている。

衣類の上からでも分かる。

マンガに出てくるような無骨な筋肉の盛り上がりではない。

戦いに必要なところには最大限の筋肉があり、そうでないところには最小限の筋肉がある。

極めて理想的な肉体なのだろう。

「なにか？」

「あ、いえ！　何でもありません…」

私は決して男色ではない。

しかし、その男の出で立ちに同じ戦いを経験したものとして見とれてしまったのだ。

声をかけられ、少し恥ずかしかった。

「ところで、エヴァンジェリンにかけられた封印とは？」

「……」

「うむ…なんて言っていないもののお」

「…登校地獄だ」

「…は？」

「私は15年、この学園に縛られ続けているんだ！」

話を聞くと、ナギ・スプリングフィールドというサウザンドマスタ
ーの異名を持つかつての英雄に悪事をやめさせるために、15年前
に“登校地獄”という呪いを掛けられ、麻帆良学園に縛られている
のだという。

「約束したんだ、3年経てば呪いを解くと！　なのに勝手に死んだ
…」

約束の反故か…。

マギステル・マギだとか、魔法使いだとか…そんなのはどうでもい
いが、一人の男として女に約束したものを破るか。

俺が言えた義理ではないが、許しがたいな…。

「それはあなた方では解けないのですか？」

「無理だ。アイツの魔力はバカみたいにでかいからな…そんな所そこらの魔力では呪いは解けない」

「……。エヴァンジェリン、聞きたいことがある」

「なんだ？」

「もし、呪いが解けたとしたら貴様はどうする？」

「質問の意図がわからんな」

「ならば、率直に聞こう。学園を出ることが出来たら、再び悪の魔法使いとして活動を始めるつもりか？」

「…私は悪の魔法使いだからな。とはいえ、さすがに自分からバカなことするつもりはないよ」

「その言葉に嘘偽りはないな？」

「元…？」

「貴方は何を言っているのです？」

「私は誇り高い悪の魔法使いだからな…嘘は言わん」

「誇り高い“悪の魔法使い”か…」

まあ、正義の意味も知らずに正義を自称するような輩よりは信用で

きるか。

その言葉に薄く笑みを浮かべていた彼の手にはいつの間にか歪な形をした短剣が握られていた。

「その短剣はなんだ？」

「それは…」

「裏切りの魔女という者を知っているか？」

「…あれか？ ギリシア神話に出てくるコルキスの王女か？」

「正解だ…この短剣はそのメデアの裏切りの魔女としての伝説の象徴が具現化した最強の対魔術宝具だ。この短剣で斬られたものはあらゆる契約を一方的に破棄することが出来る」

「…なるほど、呪いとは一方的な契約と見ることも出来るね」

「じゃ、じゃあ、その短剣があれば忌まわしいこの呪いも解けるんだな！？」

「可能だ…だが、それには約束してもらいたいことがある」

「約束…？」

「そうだ。」

「少なくとも、この約束を守ってもらわねば…」。

「一つは、呪いが解けたとしても中等部、高等部と最低でも通い続

け卒業すること。二つ目は、人々の迷惑になるような真似は今後行わないこと。三つ目は俺達の協力者となること」

「うん？ 一つ目と二つ目はわかるが三つ目はどういう意味だ？」

「俺たちはつい先ほど、この世界を訪れたばかりだ。この世界のこととは概要は知っているが、詳しくは知らない。だから、知識面においての協力と非常事態時に対しての手を貸すことを約束して欲しいのだ」

「…いいだろう」

「近衛殿と高畑氏も彼女の呪いを説くことに反対はないな？」

「僕からは特にないよ」

「うゝむ…ワシとしては少し不味いのじゃが」

「…本来彼女は3年間のみこの場にいるはずだった。話を聞けばこの世界の悪の象徴として彼女はいるみたいだが、それを縛り付けるのは人としてどうなのだ？ マギステル・マギよ」

「痛いところを突いてくるのお…しかし、これから起こりうる被害の可能性を見逃すほうが人としてマギステル・マギとしてどうかと思うと思うんじゃないか？」

俺もその意見には同意だ。

自分から言っておいてだが、俺の主張には穴がある。とても、大きい穴が。

しかし、その穴を埋めるのは俺が得意とする分野でもある。

「それなら、安心しろ。仮にそうなった場合、もしくはそうなりそうな場合は俺が彼女を殺す」

「ほお…しかし、彼女は真祖の吸血鬼で不死の存在じゃ。簡単には死なんぞ…ましてや、完全に力を取り戻したエヴァは間違いなく最強の呼ぶに相応しい魔法使いじゃからの」

「不死？ 悪いがそんなものは存在しない。エヴァンジェリンよ、貴様は生まれた時から吸血鬼だったのか？」

「いや、最初は人間だった。とある人間にな10歳の時に吸血鬼にされたんだ」

「それは、噛まれたとかではなく、儀礼的なものでか？」

「恐らくはそうだろ…ちょっとまで、まさか吸血鬼のあれも一緒に解けるということは言わないだろうな」

「恐らくは問題ない。真祖とは生まれながらのという意味だ。その儀式も吸血鬼になる呪いではなく、肉体の転生に近いものだろう。恐らくは問題ない」

「恐らくなのだな？」

「…いや、確実に問題ない」

先ほどから、魔眼の力で彼女の体の流れを視ている。一つ魔力に歪みがあるが、それは登校地獄という呪いなのだろう。しかし、それ以外は全く問題がなかった。

「どうする？　怖くなっただか？」

「……」

「エヴァンジェリン」

先ほどから、口を閉ざしていたメドゥーサが口を開いた。
その声のするほうに反応すると彼女は微笑んできた。
まるで、すべての者を魅了するかのようだった。

「元を信じていいですよ。　彼は一度口にしたら、死んでも守る実直な人間です」

「…しかし、会ってまもない男を完璧に信じろというほうが」

「確かに、難しいでしょう。　ですが、私も彼にすくわれた身ですから」

「そつえば、貴様は何者なのだ？」

「…？」

「どういう意味だい？」

「茶々丸が言っただんだよ…この女は人間ではないと。　魔力と何かわからないもので出来た人の形をした何かだってさ」

「…抜かりましたね。　まさか、いきなり見抜けられていたとは」

「確かにな…まさか、人外はいるとは思ってはいたが、機械人形がいるとは露にも思わなんだ」

「それで、貴様は何なんだ？」

「それを、貴様に言う必要があるのか？」

「お前に聞いているわけではない。私はこの女に聞いているんだ」

言わせるわけにはいかない。

今はまだ早すぎる。

彼女に怪訝な視線を送らせたくは無い。

「元…かまいませんよ」

「しかし…！」

「貴方は私を否定しないのでしょうか？」

「……！」

彼女は目の前にいる男が自分の存在を否定しなかったら、それでいいのだ。

恋は盲目…とはいうが、目の前の彼女はそうではなかった。

言葉だけを聞けば盲目にも聞こえよう。

しかし、その目は綺麗に澄み通っていた。

俺があげた魔眼封じの眼鏡をかけているのにもかかわらず、その目はそれでも魅了があるものに感じる。

「エヴァンジェリン…あなたの疑問に答えましょう」

「……私も化物なんですよ……」

「化物だと？　貴様も吸血鬼だとか言うのか？」

「確かに血は吸いますが……吸血鬼という概念のモノではないですよ」
「なら、なんだというんだ」

「メドゥーサ……私の名前が答えです」

「……ゴルゴン三姉妹の怪物メドゥーサか？」

「はい」

メドゥーサ…ギリシア語で女支配者つまりは女王の意味をもつ。

かの女神アテーナーが羨むほどの美貌と美しい髪をもっていた美しい女性の名だ。

しかし、その彼女はあまりの美しさで女神の嫉妬と怒りを買ってしまったのだ。

そして、形なき島という流刑島に姉であるステンノ、エウリュアレと共に追放された。

「ですが、それでも英雄達の討伐は止むことがありませんでした。

私は姉達を守るために彼らを殺し続けました。一人は石に変え、一人は身体を引き裂き…殺しに殺し続けて、私は自意識を失いました」

「…ゴルゴンの怪物になったと？」

「…意識を失った私が最後に手をかけたのが、姉達でした。いつもは私を弄って笑って、私は悲しんで…それでも、私は愛されていましたし、私も愛してました。それでも、私は姉達を殺してしまいました…」

「…その後は」

「貴方達も知っているように小生意気なペルセウスに討伐されました。そして、私はその後英霊の座まで招聘されました」

「…して、英霊の座とは？」

「生前偉大な功績を上げた英雄が死後に信仰の対象となったものが英霊だ…分類としては精霊に近いな。そして、その英霊が招聘される場所が英霊の座だ」

「うん？ 彼女には悪いが少なくとも彼女は英雄とは言えないのかい？」

「何も人々に味方したモノ達が英雄とは単純には言えないのです。人々に恐怖され、忌むべき存在として信仰を集めたものも反英雄として英霊の座に招聘されます」

「なるほどな…それで、確かに貴様の生い立ちは同情に値するかもしれないが、なんでこの男が貴様を助けることになるんだ？ 話を聞く限り、貴様は幽霊のようなものだろう？」

「…それは内緒です。私と元の大切な思い出なので」

「「「……」」」

「…何だ？」

三人は元をジト目で見る。

その目は何とも言えないまるで人に嫉妬するような、微笑ましいものを見るような…そうだ、この目は凜がおもちやを見るような目だった。

「…いや何、愛されているな」

「こんな美人にこうまで愛されるなんて同じ男性として羨ましい限りだよ」

「羨ましいのお…ワシも若ければのお」

「…はあ」

「ふふふ…」

溜息を洩らす俺に彼女は綺麗に微笑む。

その笑みにこの場にいた者が男女問わず見とれたのは言わずもがなである。

「それで、呪いは解く決意はできたか？」

「む…」

そういう男の手の上では歪な形の刃をした短剣が器用にクルクル遊ばれている。そして、元は無表情で彼女の顔をのぞみ込む。

「かまわん、やってくれ」

「了解した…約束事は覚えているな？」

その問いに小さな少女が決意を秘めた目で頷く。

その目は先ほどの迷いが一切見られない、綺麗な瞳だったと覚えている。

そして、俺は彼女の胸元の皮膚に薄皮一枚刺す様に歪な刃を突き刺す。

俺は魔眼で彼女の魔力の流れを見る…うん？

確かに魔力の流れの歪みはなくなった。

「…」

「失敗したのか？」

「いや…歪みはなくなった。だが、魔力に大きな増減は見られない」

「どっつ…ッ！」

まさか、私の力を抑えるモノとナギが私にした呪いは別物だということのか！？

私は好々しい表情を浮かべる爺に詰め寄った。

「どういうことだ!」

「どうもこうもエヴァ…お主が思っている通りじゃよ」

やはり、この麻帆良を包む結界に関係しているのか!

「…そちらの事情はなんとなくは分かるが呪いは解けた…。エヴァ、約束は守ってもらうぞ」

「…チツ。わかってる…大人しくしているさ」

「そうしてもらえるとありがたい…こちらも無用な殺生は好ましくないからな」

「でも、本当に彼女を止められるのか? 確かにこの麻帆良ではエヴァの力は抑えられておるが…外に出れば」

「問題ない」

そう言つて、俺は先ほど創り出したデュランダルを肩にかけるように注目させる。

「お前たちはこの剣が聖剣と呼ばれるいわれを知っているか?」

「…すまんのお、すまんが説明してもらえんか」

「古今東西、世界には聖剣・魔剣・妖刀など多くの逸話を残した得物が多く存在する。世界で最もメジャーなのがアーサー王の象徴

たるエクスカリバーだろう。」

人々の想いをもとに星々に鍛えられた神造兵装。

「最強の幻想」
ラストファンタズム

聖剣というカテゴリーの中において頂点に立つあの剣は確かに神秘の象徴にも思える。

「そして、このデュランダル柄には伝承どおり、聖ピエールの齒、聖バジルの血、聖ドニの毛髪、聖母マリアの衣服の一部と多くの聖遺物が納められている……つまりは属性が悪・狂のモノにたいしては概念武装となる」

「概念武装とは？」

「決められた事柄を実行するという固定化されたもので、物理的な衝撃ではなく概念にダメージを与えるもののことを言う」

「概念とは存在そのものということかね？」

「その認識であっている。概念とは存在であり魂魄だ。俺の知る限りの概念武装は“浄化”、“転生批判”、“対吸血鬼に対する滅び”、“男性を拘束する”……まあ他にも色々あるがな」

「なるほどね……概念に直接のダメージを与えるのだから、不死だとかは関係ないということか」

概念武装もやり様によつては、死徒二十七祖でも殺しえるのだ。いくら真祖とはいえ、この程度の存在に遅れをとるつもりはない。それが、元の考えだった。

「まあ…そういう訳だ、大人しくしてろよ？」

「フンッ…。分かってるさ」

「それで、君達が麻帆良に来た目的は？」

エヴァンジェリンの件で話が逸れたが…ここからが正念場だ。
はつきり言って、目的はない。

いや、言葉が足りないな…標的となる存在を見極めることが目的であり、麻帆良に拘るつもりはないのだ。

「目的はない」

「ふお？」

だが、この麻帆良が一つのキーとなるのは間違いないだろう。数え切れないほどの世界を渡り、戦場で生きてきたからか、そういった勘が育まれているのかも知れない。魔眼の作用も大きいだろうが、それだけではないだろう。

「確かにこの場所はそれなりにではあるが、興味があるがこの場所そのものに目的があるつもりはない」

「麻帆良に目的があるわけではないと…？　ならば、なぜ麻帆良の敷地内に来たのじゃ？」

キーとなる理由は幾つかある。

一つ目は、魔法の存在だ。

この人物…近衛近右衛門は関東魔法協会の理事を務めているのだそう。うだ。

魔術で言うところの魔術教会の関東版のトップだ。

つまりはこのご老人を抑えるということは、魔法使い達にとって有利に動ける。

「一種の事故だよ…いや、迷子と言ってもいい」

「迷子のお…いやはや、物騒な迷子もいたもんじゃ」

二つ目は、エヴァンジェリンだ。

確かに約束はしたが、所詮は口約束だ。

それを信じられるほど俺は若くはないし、お人よしでもない。

少なくとも、俺が確信できるまでは監視下に置いておかなくては…。

仮にも、最強の魔法使いを自称している…それに封印下においてもあの戦闘力は目を張るものがある。

「こんな世の中だ…そういう身元不明の人間がいたっていいのではないか？」

「身元不明…、なるほどのお…並行異世界といったかのお？ それで戸籍のない状態でどうやって、この世界を生きていくつもりなのかね？」

三つ目は、情報だ。

この世界に来る前にイシユタルから受け取った情報のなかには魔法スマギウス世界があつた。

この世界には現実世界…旧世界と呼ばれる今いる世界の他に、対になつて存在するもう一つの世界が存在する。

それは極めて不安定かつ、歪なものだ。

この魔法世界か旧世界かは分からないが…恐らくは行った事はないが魔法世界がこの世界の歪みの中心となるのだろう。

となれば、魔法世界と関係の強いモノ達と関わりを持つことはキーポイントの中でも重要度で大きな割合を占める

「どんな世界だろうと“裏”は存在するだろ？ ならば、その中で生きていくだけさ…こいつがな」

「いやいや、このような美しいパートナーが居って裏に生きようなど男としての責務を果たしてはいないのではないかね？」

「うむ…痛いところを突くな。しかし、安心しろメドゥーサも俺も神秘に頼らずとも簡単に死ぬような存在ではない。仮にそのような場面に見舞われようと、それを受け入れていてくれる…。」

「じゃが、危険なことはないに越したことはないじゃろ？」

「ここは安全だと？」

「少なくとも、“裏”で生きるよりはの」

「だが、私達にはあなたが言うように戸籍がない」

だが、俺がこの麻帆良に居を置くことに利点があるように目の前にいる老人にも俺がいたほうがいい理由が存在する。

「それはワシが何とかできよう」

「私達をこの場所に置いておきたい…監視下に置いておきたいと？」

「随分な言い方じゃのお…」

「自分達の立場は理解している。なので、ここに居て欲しいと言つて貰えれば、こちらでも大人しく言うこと聞こうかと思ひもします」

「（…元、そういうことですか）」

「（まずいな…彼のペースに理事長も引き込まれている）」

「（この男、こちらの意図を完全に理解したうえでそれを悟られず上手く誘導されている…戦闘力だけではなく、頭も切れる…藪をつついて蛇どころか竜か）」

「（うぬぬ…まずいのお）そうかの？ それではここに居てくれる

かの…勿論戸籍は用意するからの」

「とはいえ、こちらにも用事というものがあります。そちらの監視下に入るということは自由に動くことが出来ない…」

「（全く、恐ろしいのお…少しでも気を抜けば絞り取られるだけ搾り取られてしまうのお）じゃが、こちらとしてもあまり勝手に動いてもらっては困る…君達のもつ力はあまりに強大なのじゃ…話して見て分かったが、君たちは悪い人間ではないと思っておる。しかし、強すぎる力には何かしらの騒動が付いて回るもんじゃ…本人にその気がなくとも」

「（なるほど…、絡み手で来るか）…近衛殿の言われていることは分かります。現に前の世界でもそうでしたから…しかし、身にかかる火の粉を振り払うぐらいの力はあるつもりですので…」

「（その力が問題だと…つと、いかん。熱くなつてはあちらに引き込まれるのお…）確かにそれだけの力があることはエヴァを見ればわかる。…じゃが、君たちはあくまで一個人に過ぎん…組織には敵わん。そうじゃろ？」

「こちらを脅しているのですか？」

「（…っ！ いかん、これ失敗じゃった）そうではないよ、君達がこの麻帆良にいる間はワシ等の客人なのだからのお…」

「なるほど…そういうことですか。いや、先ほどの物言い許していただきたい。気を悪くしたら申し訳ない」

「（何を考えておる？）いや、こちらも言葉が足りなかった故、気

にしないで欲しいのお。 ……そういう訳じゃ、この麻帆良に留まってくれないか？」

「…確かに、こちらにメリットはありますね。 ですが、条件があります」

「（氣よったか！）条件とは？」

「一つは私達の住まいの手配、二つ目は職の手配、三つ目はこちらに対する不干渉、四つ目はこちらに対する依頼がある場合はそれなりの代価をお願いする」

「（…おや？ 思ったよりもまともじゃの）その程度であれば、了承できよう。 仕事の件は後日連絡しよう、その時に給料についてもの。 三つ目、四つ目も問題ないの…住まいも本日はエヴァの所にでも「おい！ 勝手に話を続けるな！」…ぬう、ダメかの？」

「当たり前だ！ 何故、私がそんな面倒なことしなくちゃならんだ」

「おや？ 可笑しなことを言うの…。 エヴァンジェリンよ、そちらは神堂元という男に呪いを解いてもらった借りがあるのでないか？」

「うぐっ！」

「ふむ…確かにそうだな。 すまないが、借りを返すと思って今夜は泊めてもらえないか？」

「私からもお願いします」

ケチヨンケチヨンにされた相手をお願いされるが、全く気持ちがすつきりしない。

それもそのはずだ。

彼女は誇り高い悪の魔法使いなのだ。

この程度のこと、借りを返したなど思われたくはない。

「わかった！ わかったから、女あたまを上げろ！ あと、貴様等……この程度で借りを返してもらったなどと思うなよ！ 受けた借りは対等な価値で返すからな！」

「……案外義理堅いのな」

「私を誰だと、思っている！ 誇り高い悪の魔法使いだぞ！」

小さい身体をこれまでもかといくらい大きく逸らせ、胸をはる。そこには何も無い……。

「それじゃあ、家に行くぞ！ 今日もう疲れた……爺、タカミチこの話はまた明日だ！」

そう言つて、その反応も返ってくる前に部屋を出て行った。

「……」

通路の向こうからはエヴァンジェリンの早く来いという、彼女の声が響き渡っている。

「……まあ、近衛殿。エヴァンジェリンが行ってしまうので、この話はまた後日に……」

「…う、うむ。 それでは明日の昼にでもここに来て欲しい」

「了解した。 それでは、いい夜を…」

「失礼しました…」

彼らが出て行った、部屋は男2人の静かなものとなった。

「理事長…」

「高畑先生も今日はゆっくり寝なさい、疲れたじゃろ」

「しかし、本当によかったのですか？ 確かに監視の意味でも手元に置いておくのはわかりますが…」

「仕方にじゃろ…外に置いておいて、何かあるよりは近くにおるほうがこちらとしても対処しやすいからのお」

「…わかりました」

そう言つて、彼も部屋を後にした。

「はあ…やはり、あの時は冷静ではなかったのお…。 今に思えば、三つ目の条件を了承したのはまずかったのお…」

1人で後悔をするのであった。

第四話 吸血姫

――真祖。

家系としての大元の先祖という意味をもつ言葉。

しかし、魔術師…神秘を扱う者たちにとっては意味が異なる。

改めて、隣を歩く金髪の幼い容姿をした少女を眺める。

…やはり、世界が変われば概念も変わるか。

「…うん？　なんだ、まじまじと見て」

「いや…、やはり君を真祖と呼ぶには抵抗があつてな」

「…バカにしているのか？」

少女は自分がバカにされていると思ったのか、額に青筋を作り、あからさまに不機嫌です…と意思表示をする。

「いや、馬鹿にはしていないさ…ただ、俺達がいた世界の真祖と比べるとどうも可愛らしくてな」

「世界が変われば、概念は変わる…知ってはいましたが、こつも変わる…」

「…やはり、バカにしてるだろ！」

「そうではないんだ…君には俺達の世界の真祖について、説明したほうがいいかな…家の中でさ」

視線を前に向けると、可愛いログハウスが視界に入った。
明かりがついているのは茶々丸という、機械人形の従者がいるため
であろう。

「ふん！ いいだろう…こちらが納得する説明があれば、いいがな
…」

中に入ると、様々な人形が目に入った。

魔術師にも人形を用いたモノ達がいるため、存外に驚きはしなかったが、一部を除き、彼女の趣味によるものも多いのだそうだ。

…幼女？

「おい…今、不愉快なことを考えなかったか？」

勘も鋭いみたいだ…。

エヴァンジェリンがテーブルについたので、俺もメドゥーサと席に着く。

茶々丸に出された紅茶の香りが鼻孔を擽る。

…いい香りだ。

口につけ、喉に流し込む…鼻を抜ける香りが心地良い。

ああ、いい腕だ…。

「さあ、話してもらおうか」

「…ん、そうだな。まず、吸血鬼について話をしようか」

こちらの吸血鬼の概念がどのようなものかは分からないが、それは置いておこう。

目の前に座っている彼女を見る限り、俺達の世界の吸血鬼に比べれば危険性は低いだろう。

「まず、俺達の世界における吸血鬼は元々、人間に対して直接的な自衛手段を持たない星が、人間を律するために生み出した存在だった」

律する？

私はその言葉の意味が分からず、元にその意味を聞いてみたが、元は後でその意味も説明すると言われたため、黙って聞くことにした。

「人間を律する存在…それが真祖と呼ばれる者たちだった。律す

るとは、無限に増殖を続け、星を埋め尽くす人間達の数を減らす…
口減らしをすることだ。しかし、彼らにも吸血衝動があるため、
それはすぐに破綻した。本来、吸血しなくても生きていける存在
であるはずの真祖たちが役目ではなく、自らの娯楽のために人間達
を刈り始めたのだ」

「……」

「彼等…堕ちた真祖たちは魔王と呼ばれた。その力の大半を吸血
衝動の抑制に使っている真祖たちでは対打ち出来るはずもなかった
ため、真祖たちは真祖を討伐するための真祖を作り上げた」

「…同属を狩るためだけに生み出された存在か」

「彼女は同属を狩り続けた…しかし、そんな彼女を生み出した存在
も自らの吸血衝動に打ち勝てず、その身を墮とし、彼女に狩られた
…そして、1人になった」

「うん？ それではお前達の世界には吸血鬼は一人しかいないのか
？」

「そうはならない。なぜなら、真祖に血を吸われ、血を流し込ま
れた人間は死徒と呼ばれるモノになるからだ」

「…死徒？」

「そうだ…そして、死徒となり、長い時間をかけたものたちが自意
識を得て吸血鬼になる。彼女…真祖の姫君はその存在も狩り続け
た」

「人間たちは何もしなかったのか？」

「そんな訳がない。現に俺達の世界には聖堂教会：異端狩りを専門とする組織が存在する。代行者、騎士団、そして埋葬機関と強力な戦力を保有し、吸血種をはじめ人から外れた者達を討伐する者達が存在する」

「人外：それはつまり、真祖もその討伐の範囲内とみてよろしいのですか？」

「それは、おかしいだろう…その真祖はあくまで吸血に身を堕とした奴等しか殺さないのだろう？」

「ところが、そうではない。聖堂教会のなかでは、神秘は限られた人間：謂わば聖者や聖人と呼ばれる者達以外は触れてはいけないと認識しているからな。だから、魔術師たちとの折り合いも最悪だ。それに、真祖の姫君にも吸血衝動は存在する…彼らが真祖を殺そうとするのは当然と言えば当然だ」

「…お前らの世界は随分と物騒なのだな」

「俺が言うのも何だが、物騒だよ。神秘の隠匿に失敗すれば知った人間とその人間は魔術教会に粛清されるし、魔術そのものも命を失う危険性がでかいからな」

「粛清ねえ…この世界とは大違いだな」

エヴァンジェリンいわく、この世界にも神秘の隠匿は存在するが、それはあってないような物であり、悪くてもオコジヨにされるぐらいなのだという。

それを聞いて、開いた口が塞がらなかった。

確かにこの世界は俺達の世界とは違って、優しいのかもしれないが、それでも生ぬるい。

神秘に触れるということは死に触れる機会も増えるのだ。

その代償がオコジヨ…聞いて呆れる。

現に、隣に座っているメドゥーサも額を押さえている。

「それで、なんだが」

「…ん？」

「その真祖は強いのか？」

エヴァンジェリンは子供のような目で、こちらを見ってくる。

同じく真祖と呼ばれる彼女に興味を抱いたようだ。

「聞いてなかったのか？ 真祖とは星の意志によって、生み出された存在だと。つまりはバックアップは地球という星なのだ。…弱いわけがあるまい」

「それは貴様よりもか？」

「彼女が本気になれば、俺のような存在など一蹴されるよ。どうか、彼女に対抗できる存在など神秘を取り扱う者達の中でも一握りだ」

「いるにはいるんだな？」

確かに、いるにはいる。

死徒二十七祖や埋葬機関のNo.1や制限なしの俺とか…ああ、後は慢心を無くしたギルガメッシュもだな。

「しかし、お前では勝てんぞ…エヴァンジェリン？」

「ふん！ やってみなければわからん」

「いや無理だ。英霊くらすが2体いて足止め…それでも30%程度の力。抑制なしでの彼女の相手など、できるはずもない。そもそも、この世界に彼女はいないのだからな」

「む…！」

そうだ。

この世界に彼女はいない。

これまでの話は俺達のいた世界での話なのだから。

「英霊と真祖と言えば…」

「どうしたメドゥーサ？」

「真祖と守護者ではどちらが強いのでしょうか…？」

「…む」

嫌なことを聞いてくれる。

そもそも、守護者と真祖がぶつかり合うはずがない。

いや、可能性としてはあるのだが、想像もしたくない。

「おい、守護者とはなんだ？」

エヴァンジェリンは守護者が何なのか聞いてくる。

そつえば、言っただけだったな。

カウンターガーディアン

「守護者とは、抑止の守護者と呼ばれる存在でな、人という種を守るための存在だ。 該当者としては信仰の薄い英霊だな」

「英霊…なら、真祖のほうが強いのではないか？」

「…守護者は世界からのバックアップを受けている。 それは星からのバックアップではなくな」

「世界そのものという意味か？」

「そうだ…恐らく、この世界でも人類が絶滅の危機に瀕すれば、アイツが来るだろうな。そうなれば、制限のかかった俺では時間稼ぎが精一杯だ」

「だが、20年前の魔法世界での戦争にそんな奴がでたとは聞いたことはないぞ？」

彼女曰く、20年ほど前に魔法世界で大きな戦争があったそうだ。被害は甚大で、多くの人たちが死に、魔法世界そのものも滅亡の危機に瀕したのだそうだ。

「…ふむ。だが、その程度では抑止力は働かないだろう」

「どうということだ？」

カウンターガードイアン

抑止力は集合無意識によって作られた、世界の安全装置である。人類の持つ破滅回避の“アラヤ”と、星自身が思う生命延長の“ガイア”の二つが存在し、そのどちらも現在の世界を延長させることが目的である。

世界を滅ぼす要因が発生した瞬間に出現、その要因を抹消し、カウンターの名の通り、起きた現象に対してのみ発動する。

「魔法世界が“アラヤ”と“ガイア”…二つの祈りの範疇外の可能性もあるが、少なくとも、その程度の被害では抑止力は働かない。

アラヤはあくまで人類が滅亡の危機に瀕した時にしか働かず、ガイアは星が滅亡の危機に瀕した時にしか働かない。仮に魔法世界がその危機に瀕しても現実世界がその危機に瀕してないのだから、抑

止力は働かないだろう」

「ふーん…随分と気の利かない奴等だな」

「全くだ…」

俺もそう思う。

口に含んだ、紅茶は既に冷えており、香りもほとんど飛んでしまっている。

茶々丸が新しく、カップに紅茶を入れてくれたが、その彼女から一つの疑問が投げかけられた。

「元様とメドゥーサ様はこちらの世界の方々ではないのですよね？」

「ああ、そうだが？」

「ならば、この世界には抑止力はないのではありませんか？」

確かにこの世界は俺達のいた世界とは違う、並行異世界だ。しかし、その可能性はなかった。

「それは、ありません」

「なぜでしょう？」

「それは、私と元がいるからです」

「「？」」

俺とメドゥーサがいる。

それが、この世界にも抑止力が存在する証明でもあった。

「何故、お前達と抑止力が関係するんだ？」

「それは俺が調整者だからだ」

「調整者…？ 爺にも聞いていたが、それはなんだ？」

「調整者とは、呼んで字の如く調整する者のことを言う」

「何のだ？」

「運命だ」

「「な!?!」」

調整者とは根源の機能の一端であるアカシックレコード…絶対運命に入り込んだイレギュラーを排除し、星々と人々の存続を確定させる者を指す。

「ならば、貴様も抑止力なのか?」

「具体的に言えば違う。調整者とはそもそも、抑止力を…アラヤとガイアを働かせないために生み出された役職だ。アラヤが働けば、多くの人間が死に星の存続も危ぶまれる。また、ガイアが働けば、星は残るが人間の命などは範疇外だからな。それ故に調整者は、抑止力とは違って、これから起こりうるであろう人類と星の危機の前に現われ、それを正すことが目的となっている」

「「……」」

「アラヤの霊長の守護者は最終安全装置ゆえに…極端に言えば、どれだけの九の人間が死のうと一の人間が生き延びれば良いという考えだし、ガイアは星が残れば、人間など死に絶えても良いという考えだからな」

まあ、それ故に管理者群は根源や世界と折り合いが悪いのだから。

「…つまり、お前は人間ではないのか?」

「まあ…人の道理から外れ、世界の理から外れてしまったというのなら、人間ではないだろうさ」

「その力は人間の限界を超えてはいないですがね」

「どういう意味だ？」

「そのままの意味だ。真祖のように星からのバックアップを受ける訳でもないし、守護者のように世界からのバックアップを受ける訳でもない。かといって、吸血鬼のような人外になったわけでもない。人間のまま、理から外れただけの存在だ」

「…そうか」

言葉を見つけられなかったのだろう。

あまりにも意外な事実で情報が脳内で処理しきれないのだろう。

「…ちょっと待ってください！」

「…茶々丸？」

自分の従者が言葉を荒げることが珍しいのか、エヴァンジェリンは目を大きく見開き、驚いている。

自らの行動に気づいたのか、彼女は頬を赤くした。

だが、その頬の赤らみもすぐになくなった。

「元様は『これから起こりうるであろう人類と星の危機の前に現われる』と言われましたが、それは…」

「…！！　おい、元！」

「…（迂闊でしたね、元）」

迂闊だった。

口を滑らした…まずいな。

だが、今更、話をあやふやにすることなどできない。

「…迂闊だったな。…これからする話は、決して誰にも言っな…
近衛老にもだ」

「…それほどまでにか」

「俺が今まで、調整者として渡ってきた世界はアカシックレコード
にイレギュラーが入り込んだ世界だ。そもそも、それがなければ
俺が世界に介入することは世界から許されていない」

「アカシックレコード…人智学の創始者であるルドルフ・シュタイ
ナーが提唱した宇宙の彼方に存在する全宇宙の過去から未来までの
全てが書かれた記録のことですね」

「…絶対運命、アカシックレコードに人類の滅亡と世界の破滅が記
されていることはそれほど珍しいものではない。その理由は、相
対してそれを防ぐ英雄も記されているからだ。だが、不純物が入
り込むこともあることもある」

「そして、その不純物が無視できないレベルに達したとわかった瞬
間に調整が働くのです」

「そのイレギュラーが何時、どんな時に働いているかわかりはしな
い。しかし、いずれ抑止力が働くことは確実だ。俺はそれを排
除するためにこの世界に来た」

「…なぜ、それを爺に言わなかった！」

「いきなり、現われた人間に世界の危機を諭されても信じるものなどいないだろう？」

「ム…」

「………」

「今はまだ、情報収集に努める期間だ。それに…」

「それに、なんだ？」

「この麻帆良という地が一つのキーになることは確定のようだしな」

「…どういうことだ？」

「私達がこの地に召喚された…それが全てです」

「「………」」

この会話をもって、今夜はお開きとなった。

少し話しすぎた感は多分にあったが、夜も遅い。

これからの身の振り方も明日の昼になるまでは確定していない。

メドゥーサは茶々丸に案内された部屋に行き、俺はリビングのソファーに横になった。

これから、どうなるかな…こいつがさ。

第五話 朝

ここは夢だろう…。

…理由？

それはわかりやすい。

「よお…」

俺が最も憎むべき男がいるからだ。

昨晚はエヴァンジュリンの家に泊まり、ソファ―に横になったところで記憶がなくなった。

「…カニバル。貴様もこの世界にいるのか」

「クククク…勿論いるよ。まあ、この世界に来る前に再世者にこっぴどく殺^{やら}れたんだけどな」

「そうか…海でも魂魄ごと貴様を屠ることは出来なかったか…」

醜悪で低い笑みでこちらを眺める男に言い切れぬ憤りを覚える。

例え、ここが夢の中でも殺してやりたい。

「…いつまで、お前は人の可能性を信じ続けるんだ？ …アムロじやあるまいし」

「俺はアイツほど、人間を信じきっているわけではない。ただ、可能性を持っている人間が1人でもいる限り、俺は調整を止めるつもりはない！」

「クク…アハハハハ！！！」

耳に響き、脳を壊すのではないかという忌々しい声を夢中で笑い続ける。

答えを馬鹿にするかのように……。

「その果てに再び記憶を、力を封印し…そして、心を身体をすり減らしていくのか！？」

「それはない！ もう、間違いは犯さない！」

「どうだかな！？ お前は良くも悪くも人間だ！ 幾ら心を強く律しようと言様は脆弱だ！ 再び、過ちを繰り返す…！」

「断言するな！！ ……俺は知っている。 過ちを乗り越えた人間を、可能性を信じきった人間を、弱さを強さに変えた人間を…！」

「…ニュータイプ然り、イノベーター然り、正義、調和、友愛、全てが殺しの正当化にされる……。それが人間だ」

「それが全てではない…そう信じている」

カニバルは溜息を一つ洩らし、男に背を向ける…。

「そう言うお前が一番…」

——人間を信じてないくせに——

「カニバル！！！」

そこは彼女の家の居間だった。

これが、朝の目覚めか…嫌過ぎる。

あいつの言葉を拭い去るように…額に手を当て、溜息を洩らす。
頭を上げると目の前には自分の身長を気にするといふ可愛らしい悩みをもつ彼女がいた。

「…メドウーサ」

「…元、彼が世界こゝろにいるですね」

「恐らくはな…」

奴がいるということが解れば、今の制限付きの俺では立ち向かえない。
い。

そうなれば、この世界の人々が奴の捕食の対象にしかない。
そして、奴に余計な力をつける要因にしかない。

「…来て早々ですが、ここの管理者に申請を……」

「制限解除のか？」

確かにそれが正しい行動なのだろうが…。

「それは難しいだろう…俺には実績がある」

制限付きの状態で、奴を屠った実績がな…。

それを、世界が、管理者が重要視すれば…制限など取れる訳もない。

「「……」」

二人で、頭を抱えていると茶々丸から、朝食の用意が出来たことが伝えられる。

時計を見てみれば、時間は7時になっていた。

テーブルに向かう途中、寝ぼけ半分に2階から降りてくるエヴァンジュリンが視界に入った。

その姿を見る限り、どうしても600年を生きるモノには見えない。

「…幼女か」

「…本人の前で言っではダメですよ」

椅子につき、目の前に並べられている食事に目をやる。

それは栄養バランスを考えられているであろう、素晴らしいものだった。

空腹のこの身にはいい意味で響く、香りが満ちていた。

「これは全て、茶々丸が作ったのか？」

「はい…ですが、メドゥーサ様にもお手伝いしていただきました」

その返答を聞き、彼女の顔を見ると小さく微笑み、少しだけですよと言っ。

…衛宮の家で手伝いをしてはいたが、なるほど……。

そして、一斉にいただきますをして、食事についた。

大した会話はなかったが、味は素晴らしかったと言っておこう。

昨晩は衝撃の事実を伝えられました。

出会って、まだ間もない方から伝えられる言葉とは思えないものでした。

世界の危機…。

誰が信じられるでしょうか。

その前に並行世界から来たと言うのも本来であれば、信じられるものではないでしょう。

ですが、マスターは信じております。

なんでも、この世界の魔法ではない魔法を見せてもらったのだそうです。

魔術と言いましたか…この世界でも古い魔法使いの方々は魔法のことを魔術と呼ぶことはありますが、毛色が全く違ったようなのです。

純粹な魔力による物質化…。

アーティファクトとは違うとのこと…、確かにそのような魔法は聞いたことはありません。

なので、昨晚の会話内容はマスターからの指示により、嚴重なプロテクトをかけました。

別段、私は自分を人間だと生まれてから2年間思ったことはありませんが、このような時に自らがガイノイドだと自覚します。

朝食の準備は私の仕事のひとつです。

「お手伝いします」

ですが、今朝はメドゥーサ様にお手伝いしていただきました。一度、断りはしたのですが、一泊させてもらった手前何もしないというのは心苦しいとのことでした。

お気持ちを無下にすることは失礼なので、あくまでお手伝いという形で手伝っていただきました。

メドゥーサ様はギリシア神話におけるメドゥーサ本人だとお聞きしていたため、多少の警戒心と、料理が出来るのかという不安があったのですが、変に手馴れていました。

お話を聞いたところ、かつて召喚された時にそういったことをした事があるのだそうです。

そして、沢山お皿を割ったと苦笑いしながら仰ってました。

その姿を見る限り、伝承に伝わる怪物の姿と隣で料理の手伝いをしている姿が重なることはありませんでした。

朝食の準備を終え、私はマスターを起こしにいきました。
メドゥーサ様は元様を起こしに行ったようです。

マスターはいつも通り、朝が弱く、目頭を擦りながらテーブルにつきました。

視線をずらすと元様とメドゥーサ様はお互いに微笑み合い、朝食の準備をメドゥーサ様が手伝ったことを聞くと、どこか嬉しそうにしておられました。

その姿は昨晚の自らの責務とこの世界の危機を語る姿とは違い、普通の恋人同士が仲良く、朝食をとるものにしか見えませんでした。

——私もこのように笑い合えるのでしょうか——

「…うん？ エヴァンジェリン、コスプレか？」

「アホか！」

「マスターはこれから、学校です」

「茶々丸もですね？」

「はい」

こちらのアクションに一々返してくれる彼女は素晴らしく弄り甲斐がある。

もし、この場にエミヤがいれば素晴らしい光景を見せてくれただろう…。

「ふん！ 貴様との約束もあるからな、もうしばらくは大人しくしておいてやる」

「全く…素直なんだか素直じゃないのか」

「うるさい！」

「フフ…」

「ああ、マスターが楽しそう…」

俺がエヴァンジェリンの頭をガシガシと撫ぜてやると、彼女は顔を

真つ赤にしながら、子ども扱いするなと怒声をあげる。

しかし、俺はそれを止めることなくソレを続ける…それに合わせ、小さな身体から生える腕をブンブンと音が鳴りそうな勢いで回すが、それもリーチの差で俺には届かない。

その光景にメドゥーサは微笑み、茶々丸は何やら感動を覚えているように見える。

「ああもう！ お前らはここに居ていいから、大人しくしてろよ！」

そう言つて、エヴァンジェリンはこの場から逃げるように家を出て行った。

その後を合鴨の親子のように着いていく茶々丸。

…どちらかというと逆のほうが似合いそうな気がする。

「…さて、近衛老との約束の時間までまだあるが…どうする？」

「まったりするのも魅力的ですが、学園内の探索でもしてみますか？」

エヴァンジェリンには大人しくしているとされたが、時間は4時間強もある。

確かにメドゥーサとまったりするのも魅力的だが、この後のことを考えると…。

「出かけるか？」

「そうですね…そうしましょう」

俺は彼女に腕を出し、彼女はそれに一瞬戸惑ったが、それに笑顔で腕を絡ませてくる。

「昔のあなたからは考えられませんか」

「こっついのは嫌いか？」

「…人によります」

俺は笑い、彼女は微笑む。

ああ…そうだな、こっついのを幸せっていうのかな。

エヴァンジェリンの家を後にし、暫く歩いたところで気づいた…。
戸締りは良かったのか…？

第五話 朝（後書き）

元「久しいな…」

作者「……」

元「ん？ どうした…こちらを睨みつけて」

作者「…何、メドゥーサといちゃついてんだ！」

元「お前が書いたんだろ」

作者「メタるな！ チクショウ…なのはとかアルトリアとか、その他諸々に告げ口してやる！」

元「なっ！？ それは卑怯だぞ！」

作者「黙れ！なのはさん！アルトリアさん！！元が浮気してますよー！！」

メドゥーサ「……」

作者「げっ！？それは石化の…」

作者は意石になった…。

第六話 夜までは…

——麻帆良学園都市。

埼玉県麻帆良市内に存在する、幼等部から大学部までのあらゆる学術機関が集まってできた一つの学園都市であり、麻帆良学園と呼ばれているそうだ。

その広さ年度始めには必ず迷子がでるといふ…さらには学園にある“さんぽ部”なるものまで存在し、部員もそれなりの数がいるといふ広さである。

「凄いな…」

「全員学生ですね…」

目の前には、朝の通学ラッシュにより鉄道、道路ともに大混雑を極めているという一つのカオスが生まれている。

どうやら、これも麻帆良の一つの名物となっているようだ。

これ“も”というのは、目の前に聳え立つ一本の大木である。

世界樹…正式名称は“神木・蟠桃”というらしい。

学園中央に聳え立つ、樹高270mという他に類を見ない巨木である。

「なんだ…この魔力は」

「神木と呼ばれるものは多かれ少ならず魔力を内包しているものですが、これは…」

尋常ではない魔力だ…。

下手をすれば、この一本に内包されている魔力だけで一つの世界に存在するマナに匹敵するのではないかと思える。

魔眼を凝らして視ると、周辺のマナを少しずつではあるが吸収しているようだ。

妖怪桜として有名なのは白玉楼だが、神木・蟠桃も何かの手違いで怪へと化けるかもしれない。

そうならば……。

「島か…」

「先ほど、近くを歩いていた学生に聞いてみたところ、あの島は図書館島と呼ばれているらしいです」

図書館島…。

麻帆良湖に浮かぶ世界最大規模の巨大図書館である。

2度の大戦で戦火を避けるために世界中から様々な貴重書が集められたという。

また、それに伴う蔵書の増加によって、地下に向かって増改築が繰り返されたために現在では全貌を知るものはいなくなっているというのだ。

「司書をする人は大変だろうな…」

「そうですね。…ですが、魅力的です」

彼女の趣味には読書がある。

聖杯戦争後、家にいるときは常に読書をしているというくらいである。

年に100冊以上読書をする人を本の虫と呼ぶが、彼女はまさにソレであろう。

話は戻るが、ここ麻帆良学園には“図書館探検部”なるものも存在しているようで、その図書館島というモノの規模がうかがい知れる。麻帆良には多くの魔法使いがいるのだから、魔導書の類もあるかもしれない…。

「……」

そんな学校は嫌だ…。

「ふう…歩き疲れたな」

「フフ…そうですね」

俺たちは麻帆良駅前にあるSTARBOOKS CAFEというカフェで一休みしている。

午前中で回れるかと思っていたが、そうでもなかった。

というより、無理だ。

広すぎる。

要所要所だけを見てきたはずなのに、全然時間が足りなかった。
現在の時間は11:40…。

「そろそろ、近衛老との約束の時間か…」

「それでは行きますか？」

「そうだな…腹の探り合いは疲れるんだがな」

そう言うと、彼女は小さく笑みを洩らした。

何故だか、わからないが彼女の笑みは中傷の類ではなかったので、そのまま流した。

席を立ち、会計を済ましカフェを後にしようとしたところで、聞きなれない男の声で話しかけられた。

「こんな所にいたんだね」

昨晚の魔法先生の1人であった。

「貴方は…タカミチで良かったかな？」

「そういえば、自己紹介がまだだったね。タカミチ・T・高畑という…。挨拶が遅れたが、宜しく頼むよ」

「こちらこそ、ちゃんとした挨拶が遅れた…神堂元だ。どのような付き合いになるかは解らんが、高畑…宜しく頼む」

「メドゥーサです。よろしくお願いします」

俺は握手を、彼女は会釈で挨拶を返す。

昨晩は挨拶どころではなかったため、お互いに名前だけは知っていたが挨拶はしていなかった。

これでお互いに正式に挨拶を交わしたことになる。

「それで、そろそろ時間だから理事長に会う時間も近いから案内に来たんだ」

「それは助かります…さすがに一度訪れただけなので、道順に自信がなかったのす」

「そうだな…悪いが案内を頼む」

「了解した…それじゃ、着いてきて貰えるかな」

先頭を歩く高畑のあとを歩く。

さあて、狸の化かし合いの時間か…。

「おお、待っておったぞ」

学園の通路を歩き、扉を通り抜けるとそこには…。

「やはり、化生だな」

「ふお！？」

化生紛いの老人が鎮座していた。

魔眼を凝らし、視てみても…やはり人間だ。

世界が変われば、真祖の概念も変わるし、人間の概念も変わるか…。

「酷くない…？」

「そうだよ…理事長ただだよ」

「タカミチ君が一番酷いのお…」

一番の敵というものはいつの世も身内だぞ…近衛老よ。

「さて、お遊びはここまでとして…昨晚の一つ目と二つ目の条件の答えを聞きに来たんだが…」

「そうであつたの…それじゃあ、これなんかどうかの？」

そう言つて、近衛老が引き出しから取り出した書類は仕事と住居のモノだろう。
その内容は…。

「ふむ…住まいは書類を見る限り、代表的な日本家屋だな。それに大きさもかなりデカそうだ」

「仕事は…図書館島の司書に中等部3 - Aの副担任？ それに警備員とは…？」

「見てのとおりじゃ。司書にはメドウスくん、3 - Aの副担任には神堂くんに就いてもらおうと思つておる。麻帆良学園には盗賊紛いや物騒な侵入者も多くての…警備員は夜間の時間の空いたときだけでもいいのじゃが、2人をお願いしたいのじゃ」

嘘だろ？

「司書も警備員も良い…だが、教師というのはふざけているのか？」

「いやいや、ふざけて等おらんよ。3 - Aの担任というのが10歳

の子供なのじゃ」

「「な…！？」」

ふざけているとしか思えない。

それも、俺達にはなく子供達にだ…。

言い知れぬ怒りが沸々と沸いてきた。

「貴様…死にたいのか」

「「な！？」」

「元…！」

「…！」

知らず知らずのうちに殺気が漏れていたようだ。

隣に居る高畑はこちらに対して身構えている。

肺に空気を流し込み、大きく深呼吸をして、気を落ち着かせる。

殺気は押し込めたが、それでも怒りは収まらなかった。

「貴様はそれでも教職者か？ 学童期から青年期における子供のソレが疎かになれば、将来への子供に対する影響がどれほど大きくなるか解らんはずもないだろう…！」

「…うぬ。 言い返すこともできんのお…じゃが、理由があるんじゃない」

この老人が言うには、ネギ・スプリングフィールドという少年が担任を勤めているのだそうだ。

少年はイギリスにあるメルディアナ魔法学校という魔法学校を首席で卒業し、その最終課題として、この日本の学校で先生をするために3-Aで担任を務めているのだそうだ。

「先生として生徒に教えるだけの知識量は充分にある。それにの、彼はサウザンド・マスターの息子なのじゃ…」

「……」

「クソですね」

「…ぬう」

「……」

千の魔法を使いこなす“千の呪文の男”サウザンド マスターと謳われる最強の魔法使いであり、世界を救った英雄と呼ばれる男だ。
親の七光りによる贖いか…。

胸糞が悪い…。

「先生とは、先に生きて教え導くものだ…。いくら、知識があるうと10歳のガキが青年期多感な少女達の悩みを解決できるだけの人生を積んでいるとは思えん」

「それに学校の教諭ということはそれだけ、子供達に関わらず人と触れ合う機会も多いものです…。10歳の子供が神秘に対してしつかりとした認識を持っているとは思えません。遅かれ早かれ神秘が漏洩するのは確実と考えるのですが」

「「う…」」

「おい…まさか、既に」

「いや、何もなかった!」

「そうそう、問題ないよ!」

そうとは思えない。

こいつらは嘘を付く気があるのか、ないのかわからんが…顔に出す
ぎた。

なんだか…死ねばいいのに。

「もういい…副担任になってやる」

「おお、そうか! いやぁ良かったわい」

「だが…! その少年が神秘に対しての対処をミスした場合はこち
らの判断で対処させてもらう」

「それはダメじゃ!」

「ダメなど言わせん! たかだが一人のガキのために多くの子供達
の将来を壊すわけにはいかん…必要であれば、そのメルディアナ魔
法学校とやらに送り返す」

「そうはいかないよ。彼は全ての魔法使いにとって希望なんだか
ら」

「ふざけるな…それでも教職者か!」

「とても先生の…いえ、マギステル・マギが発する言葉とは思えま

せんね」

「くっ……」

やはり、この世界の魔法使いの掲げる立派な魔法使いはただの独りよがりであつたか…。

エミヤを連れて来れなくて良かった。

アイツにこんな腐った正義など見せずにな…。

「…この世界では神秘の隠匿を守れなかった人間はオコジヨになると聞いた。ネギという少年が仮にこれから神秘を守れなければ、そしてその一般人には…状況によって、それなりの処置を取らせてもらう！」

「それは「…いいじやろう」理事長!？」

先ほどとは打って変わり、近衛老の態度が変わった。

この狸め…何を思いついた？

「君の言うとおり、ネギくんが間違った行動を取れば、その時は君の裁量に任せよう…、そのかわりと言つては何じゃが…」

「…理事長!？」

「ほお……」

「……」

目の前の老人は机に手と頭をつけて、何かを懇願する姿勢を見せた。
…何のつもりだ。

「ネギくんが間違った行動を取った時は、シツカリ導いて欲しい。生徒達に危険が及ばないようにシツカリ守って欲しい…それがワシからの頼みじゃ」

「何を今更…」「3-Aにはワシの孫娘もある」……」

孫娘ねえ…。

「木乃香は…孫娘は魔法を知らんのじゃ…じゃから」

目の前にいる男には敵わない。

魔法でも腕力でも…そんな存在に対して、人間がとることが出来る行動は逃げるか、懇願するかである。

前者が無理ならば、後者をとるしかあるまい。

それを目の前にいる老人は取ったのだ。

組織の長であり、見た目は明らかに下の男に対して…頭を下げる。

それは言葉で言うほど、簡単なことではない。

「貴様は何を言っている？」

「貴方は…!!」

「……」

俺は明日からではあるが、教師になるのだろうか…。

「教師として当然だろ？」

「…へ？」

「教師として、生徒を守るのは当然であり。人生の先輩として、未熟な者がいれば叱り、導くのは当然だろう…。何を今更言っている」

そうだ、今更なのだ。

俺は別段、副担任なることに對して怒っていたわけではない。確かに、最初は怒りもこみ上げてきたが、ソレに對する怒りなどとうになかった。

怒りの対処は目の前にいる老人と高畑の姿勢に對してであり、ネギ少年でもなく子供達にでもなかった。

「教師への着任は明日でよかったのだな？」

「そ、そうじゃ…」

「それでは、俺はここで失礼する…スーツを買いに行くので…。仕事と住居の件、感謝する…」

そう言つて、男は部屋を後にした。

その姿は怒りに染まつたものではなく、1人の漢であつた。

「何があつたんじゃ…？」

「…元はあなた方の姿勢に怒っていたのですよ。1人の将来有望な魔法使いの卵のために一つのクラスの子供達を蔑ろにしていた貴方達の態度に…。そして、悲しみを覚えたんです…彼がこの世界で希望をとじて見ていたモノが独りよがりであつたことに…」

「希望…？」

「立派な魔法使い《マギステルマギ》…。先ほどのあなた方の発言はただの大人の物でしたよね…」

そう言つて、彼女も部屋を後にした。

残された人間は昨夜と同じく、男2人であった。

「理事長…」

「皆まで言わんでええ…ワシ等は大人としても、マギステル・マギとしても失格じゃの…」

「いつの間にか、忘れていたのかもしれないね」

「そうよのお…まさか、別の世界の人間に気づかされるとは思わなかった。独りよがりの正義か…」

高畑は昨晚に彼が1人の魔法生徒に言っていた言葉を思い出していた。

『自分の価値観のみに固執』…それはしてはいけないことだった。そんなことをすれば、視界を自ら狭めているだけだ。それは誇り高い悪にすら劣るものだった。

人間は過ちを繰り返す。

だけど、過ちを繰り返さないように努力することが出来るのもまた人間だ。

「僕は彼を信じててもいいと思います」

「ほお…昨日までとは打って変わったのお」

「見知らぬ子供達のためにあそこまで怒れる人が信じられないはずがありません。少なくとも、僕は彼のおかげで自分の過ちを再確認できました。あまりに当たり前で考えることすら忘れていたことを…」

「それはワシも同じじゃ…」

彼が討った楔は少しずつかもしれないが、変化をもたらしているのかも知れない。

第七話 杭と拳と…

先は大人げなかったな。

1人の男として、大人として、神秘を扱う者として彼らの姿勢が気に入らなかったのは事実だ。

しかし、自らの立場が悪くなるのは確実であろう行動だったと今は反省している。

しかも、今は俺一人ではなく、メドゥーサも一緒なのだ。
軽く自己嫌悪に陥っている…。

「元…スーツは買ってきたのですか？」

「一応な…そういうば、お前はスーツを買わなくて良かったのか？」

「私には貴方に創ってもらった衣服がありますから…」

そう言っている彼女の着ているものは、エヴァンジェリンの家で創造した黒いセーターと標準的なデニムのパンツである。

しかし、彼女が持っている衣類はその一セットしかないのだ。

「そうは言っても、それしかないだろ？ まさか戦闘服で過すわけにもいかないし…」

「今日は日も暮れましたので、後日買いに行くことにします」

戦闘服…サーヴァントとしての服はボディコン的な黒と紫のモノであり、日常生活で着ていくとすれば…刺激的過ぎる。

「それにしても…この家はいいですね」

「ああ…近衛老には感謝しなければな」

用意してもらった家は所謂、武家屋敷である。

私室3つ、客間2つ、10畳の居間に広い庭がある。

二人で住むには過剰すぎる広さだと思うし、身元不明の不審者に与える住居としても恵まれすぎている。

俺たちは居間でくつろいでいる。

先ほど、エヴァンジェリンが訪れた際にあまりの素晴らしい佇まいに怒りの咆哮を上げていたのはいい思い出だ。

『こんな良い家があるんなら、何故紹介しなかったあああ！！』

確かにそう思う…。

まあ、それは日頃の行いの違いだと諭した。

勿論、自分が日頃素晴らしい行いをしているなど言うつもりはない。

そして、彼女が来た時に近衛老の伝言として、今夜警備員同士の顔見せとして試合があるのだそうだ。

時間が来れば迎えが来る…そして、動きやすい格好で来いと的事だ。俺はいつもの黒の外套と創造した黒色の聖骸布のパンツとシャツで出かけるとして…。

「メドゥーサはサーヴァントのアレでいいのか？」

「これが一番慣れ親しんでいるので…」

さて…迎えはまだかな。

街灯が夜を照らす中、僕は一人で白と黒のみで彩られる道を歩いていく。

目的地は神堂元とメドゥーサが居を構えるの武家屋敷だ。

その理由は、彼の顔合わせと力試しを行う場所である世界樹前広場まで、彼らを案内するためだ。

目的の家は、明日菜君やネギくん達が住んでいる女子寮の近くにあったりした。

…というか、目的の場所に家があるなんて今の今まで気が付かなかった。

興味がなかったため、その場所に行くことがなかったというのもそうだが…。

女子寮から10分程度でたどり着けるこの場所に、学園長の何らかの意図が見え隠れするのは、気のせいなんだと思いたい。そう思いたいが、そう思えないところが近衛近右衛門という学園長の恐ろしいところである。

道の途中でどうやっても視界に入る女子寮を横目に見ながら、ふと思う。

この時間はすでに寝ているであろう一人の子供先生とその生徒達のことをだ。

彼等に言われてしまったことを思い出してしまった。

『それでも教職者か！』

『マギステル・マギが発する言葉とは思えませんね』

そして、彼女が言った彼にとっての希望…マギステル・マギを僕たちは穢してしまった。

「情けないな…」

自らのふがない醜態を異世界の人間に晒してしまった…マギステル・マギが独りよがりの偶像だと思われてしまった罪悪感なのかは解らないが、家に向かう足は重かった。

程なくして、麻帆良においては異質な部類になる武家屋敷に到着した。

先ほどまでの落ち込んでいた気持ちを追い出すように息を吹き出し、気持ちを正す。

家主を呼び出すためのインターホンを押し、彼らを待つ。

「…はい、どちら様で…高畑先生ですか」

「もう少しで時間だからね、迎えに来たんだよ」

出て来たのは、昨晚彼女が着ていたボディコンファッションのようなものに身を包み、バイザーで目を隠している姿だった。

ボディコンはともかく、バイザーは伝承に伝わる石化の魔眼を隠すためのモノなのだろう。

「そうですか…ですが、まだ時間がありますよね？」

「うん？ …そうだね、もう少し時間はあるかな」

自分の腕時計に目をやると、待ち合わせの時間まで50分ほどある。世界樹前の広場までは30分ほどかかることから、確かに向かうにしても時間があるのは確かだ。

「少しではありますが、上がっていただけます」

「それじゃあ、遠慮なく…」

敷居を跨ぎ、鹿威しの心地よい音に耳を傾けながら板張りの縁側を歩き、居間へと向かう。

恐らくは新調されたばかりなのだろうか…畳の匂いがどこか緊張していた心を落ち着けてくれる。

居間に付くと、彼女は部屋の隅に重ねられていた座布団を手に取り、僕の前に出してくれた。

僕はその上に胡坐をかいて座り、元がどこにいるのか聞いてみる。

「そういえば…「うん？ 高畑が迎えだったのか」…来ましたね」

「待たせたか？」

額に一筋の汗を流して彼は現われた。

裏庭のほうから来たことを考えると、鍛錬でもしていたのだろうか。その手にはタオルと鞘に収められた刀のようなものが握られていた。

「いや、僕も今着たばかりだし、それにもう少し時間はあるよ」

「そうか…客に何も出さないのは無礼だな…メドゥーサ、茶々丸がくれた茶菓子はまだあつたよな？」

「はい…今用意します」

「いいのかい？」

「短い時間とはいえ、客だからな。まあ…寛いでくれ」

そして、彼女の用意してくれた茶菓子と急須で入れられたばかりの熱々の番茶に口をつける。

うん…おいしい。

だが、落ちていてばかりもいられない。

僕がここに早めに来た理由は、彼らに言わなければならないことがあつたからだ。

「昼はすまなかつた…」

僕の目の前に座っている男女に深く頭を下げる。

その意味を一瞬で理解してくれたのか、彼らの表情は真剣なものとなっていた。

「僕はマギステル・マギとして…いや大人として最低なことを言ってしまった」

「言っただけではないだろう？」

「……、その通りだ。僕はネギくんがやってきたことに目を背けてきた。大人として手を挙げてでも怒らなくてはいけないことをしてこなかった」

彼が言うには、無自覚に魔法を発動させてしまい女子生徒の衣服を吹き飛ばしてしまった。

惚れ薬を作り、女子生徒につかった。

女子生徒の前で魔法を使った。

試験で生徒受からせるために図書館島の魔導書…メルキセデクの書を女生徒と探しに行つて、神秘を曝け出した。

頭が痛くなってきた…。

「…それで、お前たちは何の対処をしてきた？」

「…何もしてこなかった」

「それは、その時はまだ本採用ではなかったからか？ その少年が英雄の息子だからか？ 将来有望な魔法使いだからか？」

「……」

今にしてみれば、どれだけ自分達が愚かな行為を繰り返してきたのかわかる。

裏に関わったこともある僕は、魔法に関わることの危険性を身を通して理解している。

なのに、それを元教え子の子供達に晒してきた。全ての感情を通り越して、恥ずかしさしか残らない。

「…その顔を見れば、反省していることはわかる。だから、過去に対してこれ以上何かを言うつもりはない…。だが、俺はこれからはそれなりの行動を取らせてもらう。昼にも言ったがな…」

「僕もソレでいいと思う。だけど、彼がマギステル・マギを目指す魔法使いの希望であることには…そして、魔法使いの希望であることには変わらないんです」

英雄の息子ゆえに必要な以上の期待を抱かれるか…。

その少年も災難だな。

だが、だからと言って子供達の未来を潰すわけにはいかない。

「わからなくはない。だが…いや、これから先のことはその少年を見てから決めよう」

「そろそろ、時間では？」

時計を見ると、時間は待ち合わせの時間まで30分を切っていた。

「ああ…そうだね、それじゃあ行くのか」

これから先に結論を延ばす。

それはただの先延ばしなのかもしれないが、見てみないことには決まらない。

僕たちは、家を後にして待ち合わせ場所である世界樹前まえの広場

に向かうことにした。

「高畑…今までの感情は一端捨てて、これから同じ場所で働く人間として改めて宜しく頼む」

そう言ってくれる彼にどこか嬉しかった。

僕の顔を見て微笑むメドウーサを見て、気恥ずかしかった。顔に出ていたかな。

着くまでの時間、無言というのも気が引けるので、いくらか歩いたところで彼らに話題を振ってみた。

「これから他の警備員たちと顔を合わせるわけだけど、緊張とかはしてないですか？」

「緊張か…自分で言うのもなんだが、緊張というのをした記憶がないんだ。…女が絡むと別だな」

「頼もしいねえ。女と言えば、エヴァが貴方の戦いを絶賛してましたよ。『アイツ以上に戦上手な人間は見たことがない』って…」

その話を聞いたのは、今日の放課後に特にやる事も無く顧問を勤めている美術部も休みだったため、ふと茶道部に顔を出したとき、エヴァに元のことを聞いたからだ。

戦いを見たのは彼女だけだったので、昨晚の様子を聞いてみると、彼女は垣根無しに褒めていた。

大した手札を切ることなく、彼女を圧倒したのだそうだ。それだけで、彼がどれだけ逸脱した存在なのかがわかる。

因みに、メドゥーサのことは『純粋な身体スペックだけを見れば、あの女ほど動ける奴を知らない』と言っていた。

「ほう、それは何とも喜ばしいな」

「そうですね…仮にも真祖に褒められるのは悪くはないですね」

「まあ、見た目は幼女だな」

今の台詞を、本人が聞いたらと思うとゾッとするね。

何というか、アルコル…死兆星が頭上の夜空に輝きそうだよ。

「そういえば、今夜は顔合わせと力試しを兼ねてとの事だが、力試

しはどんなことをすればいいんだ？」

「別にこれと言って特別な事はないよ。ただ他の警備員——魔法先生や魔法生徒に、貴方達の戦いぶりを見せればいいだけなんですから」

「そうですか…私はともかく、元はどうするんです？」

「どういう意味だ？」

「魔術中心でいくのか、体術中心でいくのか、剣術中心でいくのか…どうするんです？」

「ふむ…」

実際どうするかな。

まあ、その時の相手の得物に任せるとというのが本音だが、魔術は却下だな。

あまり、手札を見せるわけにはいかないしな。

「羨ましいですよ。それだけ、手札があるというのはね」

僕の返答に彼は苦笑いを浮かべながら『そうしなければ、生き残れなかったしな』とどこか懐かしむような表情を浮かべていた。

それに1人の男が生きてきた環境を想像しながら、夜の道を男2人女1人で歩いていく。

元もメドゥーサはあまり口数が多い方じゃないのだろう…この会話を最後に特に何を話す事もなく、そのまま世界樹前広場に到着した。

「ほほ、来たようじゃの」

僕達の視界に最初に入ったものは…。

「高畑…こいつを斬ればいいのか？」

「タカミチ…これを通していいのですか？」

「ふお！？」

「うん…」

「タカミチくん！？」

人外染みた学園長だった。

言っておきながら、学園長のアクションに無視しながら、階段を上り、踊り場に向かう。

その場にいたのは、学園長は勿論のこと、魔法先生は右から刀子先生、神多羅木先生、ガンドルフイーニ先生、シャークティ先生、瀬流彦先生、式集院先生…そして、僕を含めた七名。

魔法生徒は高音君、佐倉君、夏目君の三名。

そして、妖怪の討伐依頼をよく受けてくれている桜咲君と龍宮君の2人に、エヴァと茶々丸君を合わせた計十五名。

実はこの収集は今日決まったのだ。

当日召集にしては充分すぎる面子でだろう。

「なあ…もしかしてワシって嫌われてる？」

「…何を今更？」「」

「（シクシクシク…）」

わざとらしく、シクシク泣く近衛老を視界の隅に押しやり、集まった者達に目をやる。

全員が昨晚、俺達が初めてこの麻帆良を訪れた時に増援として集まった者だ。

高畑は俺達の少し前から、魔法先生と魔法生徒達がいる場所に移動している。

恐らくこの中で一番、戦闘能力が高いのは近衛老を除けば…高畑であろう。

その次は日本刀を持った女史だろうか。

どちらにしても、こちらの魔法使いと魔術師のアベレージはこの世界のほうが高いのだろう。

曲がりなりにも、魔法使いということか…。

そして、復活した近衛老が俺達の説明を始める。

「急な召集によく集まってくれた皆の衆、感謝しとる。

通達していた通り、彼等を新しく警備員として雇った。

全員が昨晚顔を合わせたとは思うが、紹介しよう…神堂元くんとメドゥーサーくんじゃ」

学園長の言葉に、元とメドゥーサーが静かに一步を踏み出す。

実際に彼らの力を見たのはエヴァだけだが、歩くという動作だけで何人かは彼等の実力の一端を垣間見たようだ。

実際僕も驚いた。

ここまで、彼等と共に来たのは僕だが…その時に感じなかった“モノ”を感じた。

それは殺気ではなく、正に大きな気配が動いたという感じだった。

「紹介に預かった…神堂元だ。この場に居る方々とは昨晚顔を合わせたとは思うが、明日から3・Aの副担任と警備員を務めることになった。改めてこれから宜しく頼む」

「初めまして…メドゥーサです。図書館島の司書と同じく警備員に就きました。若輩の身ではありますが、よろしくお願いします」
簡単に挨拶をし、頭を垂れる彼等の後を学園長が言葉を紡ぐ。

「昨日の今日で疑問を抱いているものが殆どではあると思うが、彼らは信用に足る人物じゃ」

俺達がこの世界の人間ではないこと、メドゥーサのことを話はしなかった。
だが、信用に足る人物か…昼のことは悪いほうに行かなかったと信じたいな。

沈黙の中、1人の魔法生徒が手を挙げた。
その生徒は昨日の綺麗な金髪が映える少女であった。

「…色々と疑問がありますが、学園長は彼らを信じているのですね？」

「うむ…それに間違いはないのぉ」

「でしたら、私から言うことはありません。神堂元さん、メドゥーサさん…これからよろしく願いします」

少女の名は高音・D・グッドマン。

こちらにいい思いを持つてはいないと思ったんだが…。

「予想外だな…」

「…？」

「君は俺に対して、いい気持ちを持っていないと思っていたんだが…」

彼女は一瞬、顔を顰めた。

しかし、それはすぐに無くなり、自らの胸を張るように言葉を発した。

「昨日は私に非があつたんですから、私がそれに対して不快感を持つのはお門違いですわ」

「そこまで真つ直ぐに來られてはな…、いや昨日は俺も言いすぎた… 申し訳なかつた」

静かに頭を下げる俺に戸惑ったのか、彼女は拳動不審である。しかし、小さく咳払いをし、頬を赤く染めている。

「頭を上げて下さい。先ほども言った通り、私が悪かつたのですから…」

これがマギステル・マギなのか…。

自らの非を素直に認められる。

それは実に好ましい…。

高音君は彼のことを信用できたようだ。

少なくとも、自分の非を素直に認め頭を下げてくる人間を悪い人間だとは思わないだろう。

しかし、他の先生方や魔法生徒はまだそれには至っていないみたいだ。

彼の実直さ、優しさ、厳しさを少しではあるが垣間見ている僕や学園長は知っている。

見知らぬ子供達のために本気で怒れる彼を…。

だから、早く信頼を勝ち取ってもらいたいと思う。

心の中で激励をささやかながら、送ったのは秘密だ。

「では、元君とメドゥーサ君の顔合わせはこれで終了じゃ。

続い

て、彼らの实力を見るための試合を行おうと思う。 相手は…そう
じゃな、高畑君にお願いできるかの」

「なら、私が行きましょう…」

「うん？ メドゥーサが来るのかい？」

僕としては、女性に手を挙げるのは極力避けたのだけど…。
それに、元君と戦ってみたいと思ったけど、神話における怪物と恐
れられた彼女とやりあうのも面白そうだ。

「出来れば、元君とやってほしかったのじゃが…」

「僕は構いませんよ…いや、戦ってみたい。 それに元君は剣を使
うようですし、餅は餅屋に任せましょう」

「ふお…」

こうまで、彼が好戦的になることは珍しい。
考えてみれば、彼女はギリシア神話のゴルゴンの怪物というではな
かったか。

確かに、彼女の戦いがどのようなものか気になるの。

「元君もそれでいいかの？」

「ふむ…俺は別に剣に拘ってはいないのだが…メドゥーサがやる気
になるのも珍しいしな。 俺は構わない」

「それじゃあ、二人とも位置についての」

「タカミチ…」

今まで終始無言だったエヴァが口を開いた。
突然の発言に、それがエヴァという事で、この場にある全員の視線がそちらに向かった。

「何だい？ エヴァ」

「まともにやり合おうなど思うなよ、正面からぶつかれば負けるぞ」
そう言えば、身体スペックが凄いつて言ってたっけ。

周りは、まさかタカミチが負けると言われるなんて思ってもいなかったのか、ザワザワしている。

だが、エヴァンジェリンがこうまで言うのだ。

その言葉の意味はすぐに見られる。

残った人間は二人が心置きなく戦えるよう、踊り場の更に上段にあるもう一つの踊り場に移動し、左右にある階段を上っていく。

それは元とエヴァンジェリン、近衛老も同じだ。

軽く見下ろすように、二人を見ると彼女の手には鎖のついた鉄杭、高畑は手をポケットにしまっている。

「こちらの武器は当てないようにしますが…貴方はそれでいいのですか？」

「これが僕の戦闘スタイルなんですよ」

空気はいつ始まって可笑しくないまでに高まっていた。
それが、周りの人間によるものなのか、それとも本人達によるもの

なのかは解らない。

しかし、二人は実に飄々としている。
無音と4月の夜の肌寒さがのこるこの場に、学園長の声が響き渡った。

それは戦いの幕を挙げる一声だった。

「それでは…始め！」

「「！！」」

——戦いが始まった——

「…クッ！」

「ふふ…」

鎖のついた鉄杭が僕に襲い掛かってくる。

それは一直線のものから、まるで蛇が這うような縦横無尽な軌道とまさに変幻自在だ。

エヴァの言っていたことがようやく解った。

正面からぶつかり合えば、すぐさま杭の餌食になっていただろう。

だが、このまま終わるつもりはない。

襲い掛かる鉄杭を遮二無二になつて避け、彼女と距離を置く。

「…？」

当の彼女は僕が無手なのに距離を置く理由がわからないのか、手を出すことなく10m程手前で身構えている。

それもそうだろう。

最初こそ先制攻撃をうけたが、こちらの手札は向こうにはわからないのだ。

それ故に、一度間をおけば手を出そうにも出せないのだ。

「おい…どちらが勝つと思う？」

エヴァンエリンが俺に疑問を投げかけてくる。

しかし、その答えは彼女の中で出ているようにも思える。

「普通に考えれば、メドゥーサだろうな」

「ほお…何故そう思う？」

「高畑の魔法がどのようなものかは解らんが、あいつには大抵の魔法は効かない」

「効かないとはどういうことだ？」

「大規模魔術…いや大規模魔法でも彼女には傷一つ付けることは出来ない…キャンセルされる」

「な…！？ それは魔法使いにとって大敵ではないか！」

そう思う。

現に聖杯戦争でも彼女達サーヴァントでも魔術で傷を付けることは実に難しい。

それだけの魔法をぶつけるにはそれなりの時間を有してしまう…それは戦闘において命取りにかなりえない。

いつ場面が動いてもおかしくはない。

決して気を抜いてはいけないのだ。

「……」

「…！？」

しかし、彼はそれでもポケットに拳をしまった。
それが怪訝にしか思えない。

「馬鹿にしているのですか？」

「そんな事はないよ…始めに言った通り、これが僕の戦闘スタイルだ！」

「——！」

言い知れぬ気配が彼女の身体を襲った。

咄嗟に避けたが、先ほどまでいた場所には何か衝撃が走った。

「拳を剣に？ ポケットを鞘に？ 居合い…拳に拳圧を乗せたのか？」

「ほお…わかるのか？」

「目は良いんだ、動くものであれば殆ど認識できる…だがしかし、魔法でもなく唯の衝撃波であそこまでの威力を作り出すか…」

「それは居合い拳…お前の言うとおり、居合いの要領で拳に衝撃波を乗せる」

「無手故に接近戦になりがちなものの中距離戦にも対応できるようにしたのか…大したものだが、何故魔法を使わない？」

「使わないのではなく使えないんだ」

エヴァンジェリン曰く、どうやら高畑は生まれつき呪文の詠唱ができない体質ゆえに魔法の行使が出来ないのだそうだ。

それでも、マギステル・マギを目指した故に今の戦闘スタイルを師

から受け、鍛錬を重ねたのだそうだ。

ふと、脳裏に浮かんだのは1人の後輩…後の守護者と成り果てた男の姿であった。

アイツも自らの才能の無さを嘆いていたっけな…。

「だが、魔力による攻撃でないのなら、彼女にも攻撃は通るか…」

今の彼女は受肉した身である。

魔法や魔術はともかく、物理的なものは身体に通ってしまう。

だが、懐にもぐり込まれてしまえば、サーヴァントのスペックに人間が対応できるはずも無く、高畑の負けが確定するだろう。

鉄杭を用いた変則的な中距離戦を得意にするメドゥーサ…。

近距離戦を得意としながらも、中距離戦でしか戦うという選択肢しかない高畑…。

「面白くなりそうだ…」

「クッ…！」

「…！」

お互いの交戦はこう着状態になっていた。

鉄杭を放てば、男は避けながら距離を置き居合い拳を放つ。

対して、彼女はそれを避けながら再び鉄杭を投擲する。

しかし、それはお互いに決まらず、攻撃を繰り返しながらのこう着状態であった。

「（…近づけませんね）」

「（近づかせるか！）」

彼女が距離を縮めれば、その後は彼女のサーヴァントとしてのスペックを生かして一気に勝負を決められる。

だが、彼に勝利は見えてこなかった。

距離を開け続ければ、今ままスタミナが切れるまで続くこととなるだろう。

しかし、距離を縮めても彼には勝利が見えてこない。

それに、彼は焦っていた。

「（真正面を避けたつもりだったけど…ミスったかな？）」

勝利への手を必死に考える彼に投げかけられたのは…。

「考え事とは余裕ですね？」

「な…！？」

彼女の本気であった。

衝撃を避け翔け、一気に彼との距離を縮める。

アサシンという規定外のサーヴァントを除けば、メドゥーサは聖杯戦争において、ランサーに次いでのスピードと俊敏性を誇る。

誰が、彼女の疾走を止められるか？

まるで蛇のように衝撃波を避け翔ける彼女を止められるか？

この場において、それが可能なのは元を除いていないだろう。彼は寸でのところで、懐から拳を取り出し対応しようとする。しかし、それはギリギリのところで間に合わなかった。

「がああ!!」

「ふふ…」

鉄杭による一撃ではなく、蹴りが横腹に入った。

「くう…!」

数mほど吹き飛ばされ、彼は痛む身体を必死に起こそうとするがそれはすでに遅かった。

「…これで終わりです」

彼女の居たであろう場所に顔を向けた瞬間、その首筋には彼女の得物である鉄杭が当てられていた。
少しでも動けば、首筋に刺さってもおかしくは無いほどに得物と頸動脈の距離は無かった。

「僕の負けですね…」

「はい…私の勝ちです」

勝つとは思っていたが、まさかこんな形で終わるとは…。

エヴァンジェリンは驚いていた。

それは、周りの魔法先生と魔法生徒も同じであったが、衝撃の度合いが違った。

タカミチ・T・高畑は近衛近右衛門を除けば、この学園最強とまで呼ばれている兵だ。^{つわもの}

それが一太刀も入れられず、負けたのだ。

「エヴァンジェリン…予想外か？」

「まさか、傷一つ与えることなく負けるとは流石の私も思わなかったぞ。お前にとっては予想通りか？」

「いや、まさかここまで粘るとは思わなかった。最初の一手で極まると思ったのだが…」

「私とは逆の予想だな…」

こうして、第一戦は周りの予想を大きく裏切る形で終わりを迎えた。

第七話 杭と拳と…（後書き）

作者「サーヴァント舐めんなよ！」

高畑「誰に言っているんだい？」

作者「画面の向こうの人…」

元「メタるな…」

作者「でもさ、本気も出さずにサーヴァントに勝てるはずもないでしょ？」

高畑「いやあ…本気を出すタイミングがなかったんだよ」

作者「負け犬の遠吠え？」

元「…高畑殺れ」

高畑「…了解したよ」

作者「そ、その構えは…！」

後に残るは1人の汚い屍だった…

第八話 格の違いを魅せてやる

まさかここまでとは思わなかった。

高畑先生は近衛学園長に続き麻帆良学園No.2の実力を有している強者である。

だが、目の前で繰り広げられているソレは圧倒されている彼であった。メドゥーサ…ギリシア神話における怪物の名を冠している彼女がどれほどのものは解らなかったが、正しく怪物に相応しいものだった。

刹那「凄い…」

真名「ああ。スピード、パワー、俊敏性全てが異常だ」

龍宮真名は戦場を経験した傭兵のプロフェッショナルを自称するからこそ彼女の異常性が理解できる。

刹那「気を纏っていない…？」

真名「ああ…だからこそ異常なんだ。高い魔力を有しているのは解るが、強化を使っているようにも見えない…それであれだけの動きが出来るはずがない」

刹那「人間じゃない…？」

人間とは違う雰囲気と匂いを放つ彼女が只の人間だとは思ってはいなかった。

ならなんだろう？

魔族？ 化生？ それらとのハーフ？

刹那も真名もその身が他人とは一つ違うからこそ、その違いに敏感なのだろう。

だが、彼女たち以外にもメドウーサという女性の違和感に怪訝…いや不快感にも似た感情を持つもの達がいた。

魔法先生「……」

異常すぎる。

彼らの仲間として高畑先生の实力は痛いほど解っている。

戦局は今でこそ、膠着しているもののその形は決して良い状況ではない。

一手目で押され、なんとか立て直しても高畑の攻撃は全て悠々と避けられている。

衝撃波という、目に見えない攻撃を何故こんなにも簡単に避けられるのか。

気配を感じているのか…わからない。

解らないすぎる…。

そんな者に大して人が投げかける言葉はひとつしかない。

一同「（異常だ…）」

元「お疲れ様だな」

メドゥーサ「すみません」

彼の手には白のタオルが握られており、それはつい先程まで試合をしていたメドゥーサに渡される。

タオルを渡したがいいが、彼女は汗の一滴も垂らしていない。

そんな彼女は体に付いている埃をほろうのに使っており、そんな彼女の姿にどこか笑みが溢れる。

エヴァ「…で、どうだった？ タカミチ…」

タカミチ「いやあ…流石だったよ。メドゥーサの名に偽りはなかったよ」

メドゥーサ「そんな謙遜する必要はないですよ。見たところ貴方も全力ではなかったようですし…」

元「うん？ そうなのか？」

タカミチ「そんなことはないよ。少なくとも本気でやって負けたのは事実だしね」

メドゥーサ「奥の手を出さずにですか？」

タカミチ「——！ いやぁ…あははは…」

なるほど…これが彼の本気ではあるが、全力ではないということか。その真意は高畑の様子を見てもわかるし、目を見開いているエヴァンジェリンを見ても解る。

だが、身元不明の人間に奥の手を見せるほどこの男も馬鹿ではないか…。

ぬるま湯に浸った只の男だと思っていたが、少し評価をし直したほうがいいか。

視線をある人に向けながら、学園長はその人物に進言する。

近衛「さて、彼女の実力が解ったところで次は神堂くんの試合を見てもらおうかと思う」

先ほど、学園長に餅は餅屋になんて言ってしまったけど、本音を言うと言くんと戦いたい、今日の試合の趣旨は彼らの实力を見ることにある。

僕と戦っては、彼の実力の全てを見るのは難しい。

それに、メドゥーサとの試合で想像以上に体力が消耗してしまった。だから、彼女に任せよう。

近衛「そういう訳じゃ」 刀子先生。神堂くんと試合の相手をしてもらえんかのお？」

葛葉刀子。

神鳴流の剣士であり、その剣の腕前は現在の麻帆良で最強の女性である。

そんな彼女に僕の代役を依頼した学園長も僕とメドゥーサの試合に興味をもったのだろう。

刀子「…分かりました。 どれほどの力の持ち主かはわかりませんが、彼の実力には私個人としても興味はありましたし、お受けいたします」

何の異論もなく代役を引き受けてくれた刀子先生。

長い黄金色の髪を夜風になびかせながら、静かに階段に歩を進める。その後ろを追うように静かに歩を進める元の後ろから少女が言葉を放つ。

エヴァ「…おい」

今まで無言に近かったエヴァが口を開いた。

突然の発言と、そしてそれがエヴァという事でこの場にいる全ての視線がそちらに向かった。

近衛「どしたんじゃ？」

エヴァ「もしかして、一人でこの男の相手をさせる気か？」

どういう意味だろうか？

勿論、暗に一人ではなく複数でやれと言っているのは解る。

元「それは難しい相談だな…見たところ、葛葉女史は素晴らしい剣士に見える…そんな彼女とは別に他の奴とも一緒にやれというのは？」

エヴァ「どの口がほざくか。私は少しでも、試合をまともなものにしようと思っただけだぞ」

刀子「どういう意味です…エヴァンジェリン」

自らが最強の剣士などと驕っているつもりはない。

そして、私などよりも目の前にいる少女が格上であることも嫌々ではあるが、理解している。

しかし、こつも真っ向から私がこの男よりも格下だと言われれば、

不快にもなる。

エヴァ「この私が圧倒された男にお前が勝てるはずもないだろう?」

刀子「…っ！　あなたは「エヴァンジェリン」…え?」

一瞬怒りに身を委ねようとした私の肩に手をかけられたことにより、意識は彼女から男に向かった。

元「これ以上、彼女を侮辱するのは止めるんだ…彼女は間違いなく一流の剣士だ。　侮蔑されるような謂れはない」

まさか、初対面にも近い彼から援護を受けるとは思わなかった。

刃を合わせたことはないにも関わらず、何故一流と断言できるのだろうか。

いや、それ以前にいつの間に私の背後に回られたのだろうか。全く、気がつかなかった。

エヴァ「…くっ、わかったよ。　だが「解りました」うん?」

刀子「刹那…、真名…！　来なさい」

刹那「…は、はい!」

真名「あ、ああ…」

急に自分の名前を呼ばれたことに刹那と呼ばれている少女は声が裏返り、真名と呼ばれている少女?　は態度にこそ出さないものの虚をつかれたように、自らの愛銃に手をかけて、こちらに近づいてくる。

刀子「これでいいですね？ エヴァンジェリン」

エヴァ「お、おう……」

刀子「申し訳ありませんが、少し付き合ってもらいますよ？」

刹那・真名「は、はい！（……わかった）」

二人を引き連れ、踊り場に向かうその後ろ姿は勇ましかった。

元「……俺の意思は無視なのか？」

タカミチ「まあ……ドンマイ」

エヴァ「なんか、スマン……」

肩に手を置かれ慰められ、幼女からも慰められる彼の後ろ姿は哀愁が漂っていたとだけ言っておこう。

元が腰から鞘を外して刀を抜き、鞘を踊り場の隅に置いた。
二尺余りという深紅の刀身を現した。

黒のロングコートを羽織い、ダラリと腕を下げた自然体に構えを取る。

一見すると隙だらけだが、それは明らかに誘いだとわかる。
無表情からは想像も出来ない鋭い視線がこちらを射抜く。

葛葉刀子と桜咲刹那も刀を抜き、龍宮真名は元からかなり離れたところから、スコープ越しに獲物　ハジメ　を見ている。

葛葉女史の得物…その長さは標準よりやや長い程度で、鞘を腰に差したり床に置いたりせず、刀を持っている手とは逆の左手に未だ持っている。

元「（なるほど、二刀流か…）」

刀と鞘の二刀流。それが、彼女が使う型の一つだ。
しかし、少女の方は明らかに異質に見える。

元「野太刀…？」

明らかにその小さな体とは不釣合いの長さの刀を構える少女。
しかし、その構えは硬すぎもなく、かといって緩くもない。

理想的なものだった。

元「…才能は一流、鍛錬も欠かしてないと見える。さらには後ろの彼女も一流のスナイパー…。前衛に腕の立つ者が二人、後衛もいる…詰んだか？」

そうは言うが、彼は負ける気がしなかった。

口調とは裏腹に、明らかにこちらを舐めているような口振りのソレは若い剣士のソレを燦るのに十分であった。

刹那「な「刹那、乗せられてはいけません」…え？」

刀子「中々したたかな御仁のようですね」

元「いやはや…試合とはいえ、戦場では冷静にか。いや、怒りを力に変えられることが出来る…ということか」

刀子「…刹那、真名。気を抜いてはいけませんよ」

先ほどのエヴァの発言のせいかは知らないが、葛葉女史からは既に少量の殺気が漏れている。

だが、元にそれは全く通用していなかった。

それどころか心地良く感じられた。

対して、元は微塵の殺気も発していなかった。

その佇まいは視線を除けば普段のそれと変わらなかった。

気を抜けば、凶器をその手に握っていないのではないかと思ってしまっただけ違和感がなかった。

街灯と月明かりが、彼らを照らす。

聞こえるのは弱く吹く風と、期待に高鳴っている僕の心音と呼吸音だけだ。

他の魔法先生たちも須らく同じなのか、踊り場の二人を食い入るように見つめている。

曇天の空の下、舞台は整った。

観客もいる。

後は、開演の合図を待つだけだった。

刀子「——神鳴流剣士…葛葉刀子」

刹那「同じく神鳴流剣士…桜咲刹那」

真名「……」

剣士としての血がそうさせたのか、珍しく刀子先生がそんな前口上を口にした。

それを聞いて一瞬呆けた顔になるが、それは直ぐに無くなり、口角が自然につり上がっている。

元「——傭兵、神堂元…御相手しよう！」

——今夜二回目の火蓋が切って落とされた——

瞬間、彼から殺気が放たれた。

向かう先は目の前にいる三人。

それは相手の戦意を奪い取り、萎縮させるものではなく…、

刹那「ハッア…！」

葛葉「クッ！？」

真名「クウ…！！」

まるで刀の切っ先のような鋭い殺気。

その指向性の鋭さ純粹さに、僕は息を飲んだ。

あそこまで殺気を凝縮できるのも凄いいし、何よりあんなに混じり気のない…怒りも憎しみもない純粹な殺気なんて感じたことがない。

こんなものを真正面から受けていては私でもまともに立っていられるか解らない。

現に桜咲刹那などは地に膝を付けて苦しそうにしている。

その額には鈍く光る脂汗が見えた。

龍宮真名は後衛故に距離が空いているせいか桜咲ほどではないが、苦しそうにしている。

だが、葛葉刀子はそれほどではない。

そこは流石と言えるだろうが、このままでは新たに二人を付けさせた意味がない。

元「——それでは尋常に勝負というのか」

だが、元は変わらず飄々としている。

こうまで、格が違うとは…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7646x/>

ネギま！advance

2011年11月15日14時35分発行